梅園三語　玄語　第七冊

小冊物部

安永四年本準拠
（浄書期の訂正を除く）

玄語（げんご）

小冊物部大小（しょうさつぶつぶだいしょう）

大物（だいぶつ）　並びに圖ず（ならびにずず）

小物（しょうぶつ）　並びに圖ず（ならびにずず）

混物（こんぶつ）　並びに圖ず（ならびにずず）

粲物（さんぶつ）　並びに圖ず（ならびにずず）

玄語

日本　鎮西　三浦晉　安貞　著

小冊　物部大小　一二八五七
大物　一二八五八
天なる者は精なり、時を經にし、處を緯にす、　一二八五九
物なる者は麁なり、神は經に通じ、物は緯に塞る、　一二八六〇
神は體無し、體を物に於て露す、　一二八六一
物は主有り、主を神に於て見す、是を以て。　一二八六二
天地は物にして立す、　一二八六三ー六四
天神は氣にして活す、　一二八六五ー六六
天地は大なり。偏を立てて一を全す。一の全にして成る、二の偏にして立つ、偏は成具を立す。　一二八六七
一一は絪縕す。絪縕は物を化す。小は大に散ず。　一二八六八
剖析して散ず、　一二八六九
對待して偶す、　一二八七〇
統散有りと雖も。而も同じく物を爲すなり。　一二八七一
物なる者は。天地なり。　一二八七二
天地は相い得て。物は能く全たり。是を以て

一二八七三　小なる者は大の含む所と雖も。而も
一二八七四　各おの天地を全す。同じく彼此の勢を張る。夫れ
一二八七五　天地は體にして成る。
一二八七六　象質は性にして成る。
一二八七七　成具は偏を合す、
一二八七八*　大物は一を全す、
一二八七九　神は活して用す、
一二八八〇　物は立して體す、
一二八八一　轉は外を保す、
一二八八二　持は内を運す、
一二八八三　實は止して體を持す、
一二八八四　虚は動して地を化す、
一二八八五　大物の核子は、潤濁の體を以て、寒を結びて暗を散ず、蓋し。
一二八八六　天なる者は、一氣の本幹なり、
一二八八七　　乾清の氣を以て、熱を聚めて明を播す、
一二八八八　明熱は聚まれば則ち火なり、解れば燥にして能く煦む、
一二八八九*　暗寒は散ずれば則ち影なり、結べば則ち水にして能く液す、
一二九〇*　燥は物を煦む、燥中は火を發す、

(T 515a)

一*二八九一　水は物を液す、水外は溼を解く、
一二八九二　日月景影は、上に旋轉す、
一二八九三　水火溼燥は、下に絪縕す、故に
一二八九四　物は一圓球を露し。地は結び天は散ず。
一二八九五　性體の物は、没露隠見す、
一二八九六　經緯の氣は、運轉噓噏す、
一二八九七　火は發し水は收む、
一二八九八　氣は升り質は降る、
一二八九九　其の氣は則ち鬱發達斂。凝融肅舒す。
一*二九〇〇　天の處を爲す者は、則ち景影なり、星辰は象を其の間に鋪く、
一二九〇一　地の處を爲す者は、則ち水燥なり、雲雨は質を其の中に散ず、
一二九〇二　天時は上に行す、
一二九〇三　歲運は下に旋る、
一二九〇四　日は轉じ影は追う、
一二九〇五　水は滋い燥は煦む、
一二九〇六　色を成す者は、更るがわる晝夜を行す、
一二九〇七　氣を爲す者は、代るがわる冬夏を爲す、
一*二九〇八　地は拗突して山水を列す、

一二九〇九　氣は動止して風恬を爲す、
一二九一〇　端を南北に奉して、而して地の兩極を定む、
一二九一一*　線を東西に環して、而して地の中線を分つ、
一二九一二　然り而して物と我と。能く其の中に遊ぶなり。故に
一二九一三　天なる者は、清浄の府なり、
一二九一四　地なる者は、穢濁の藏なり、而して
一二九一五　其の穢濁の中は。處を水陸に分つ。
一二九一六　水なる者は地に居る、
一二九一七　陸なる者は天に居る、
一二九一八　天中は、氣守れば則ち恬なり、雲雨は茲に路す、
一二九一九　氣旋れば則ち風なり、会晴は茲に任す、
一二九二〇―二一　同じく是れ一氣なり。動なれば則ち麁も能く横旋す、
一二九二二―二三*　靜なれば則ち精も能く竪立す　風恬の成る所なり。
一二九二四―二五*　靜なれば則ち能く竪立す、故に升降なる者を容れて、而して能く此に路す、是を以て
一二九二六　雲は之に從いて升る、
一二九二七　雨は之に從いて降る、
一二九二八　升は降を碍げず、以て恬の靜を觀る、
一二九二九―三〇　麁なれば則ち能く横旋す、故に縦横は相い拒みて、而して物を己に靡かす、故に

(PB 127)

或いは雲雨を率いて縦す、
或いは雲雨を率いて横す、
縦は横を容れず、以て風の麁を觀る、
地なる者は天に資る、故に天の有する者は、地能く之を有す、
天なる者は、地と竝立す、故に
一の有する者は一能く之を反す、是の故に
持の風恬に於るは、猶お天の轉持に於るがごとし、是を以て。
其の天に大なる者は、地に小なり、
　地に大なる者は、天に小なり、
天なる者は、動の分なり、故に動は天より大なり、
地なる者は、靜の分なり、故に恬は地より大なり、
大小有りと雖も。亦た各おの之を有す。故に
氣は持中に動きて風を爲す、之を天の轉に比すれば則ち微なり、
質は持中に止りて恬を爲す、之を天の極に比すれば則ち大なり、
動靜なる者は。虛實の用を爲す所なり。氣體は各おの之に由る。夫れ
持中の事。風恬は猶お轉持のごとし、
　雲雨は猶お日月のごとし、
天は質を容れず、乾燥は性を爲す、故に象熱にして乾燥す、

一二九三一
一二九三二
一二九三三
一二九三四
一二九三五
一二九三六
一二九三七
一二九三八
一二九三九
一二九四〇
一二九四一
一二九四二
一二九四三
一二九四四
一二九四五－四六
一二九四七
一二九四八
一二九四九－五〇

一二九五一　轉冷にして乾燥す、
一二九五二ー五三　地は象を主とせず、潤溼は物を結ぶ、故に質冷にして潤溼す、
一二九五四　持溫にして潤溼す　是を以て。
一二九五五　月は水に似たると雖も、而も地水の潤溼に於て異なる、
一二九五六　火は日に似たると雖も、而も天日の乾燥に於て異なる、故に
一二九五七　竪氣は溫潤にして、雲を升し雨を降す　其の氣は濁なり、
一二九五八　横氣は冷燥にして、会を招き晴を致す　其の氣は清なり、是の故に。
一二九五九　植なる者は止質、故に其の氣は冷なり、枯るれば則ち溫なり、
一二九六〇　動なる者は動質、故に其の氣は溫なり、死すれば則ち冷なり、
一二九六一　持中は、體の止るは則ち陸なり、燥生は之に居る、
一二九六二　體の動くは則ち水なり、水生は之に居る、
一二九六三　雨水は積りて海を爲す、
一二九六四　土石は積りて山を爲す、此の故に
一二九六五　海に在りて鹹を釀もす者は、水底の氣なり、
一二九六六　陸に在りて液を化する者は、地面の氣なり、
一二九六七　液を化して氣を疏する者は、陸中の水なり、
一二九六八　流を積みて氣を鬱する者は、海中の水なり、
一二九六九ー七〇　水陸の生は。之を動植と謂う。夫れ日月星辰の常に其の體を持し、

(PB 128)

(I 516a)

一二九七一ー七二

雲雨動植の毎に其の體を換るは、精麁の然ら使むるなり。

一二九七三

日影は明暗を布く、

一二九七四

水燥は乾潤を布く、

一二九七五

天物は明暗を以て其の處を爲して居る、

一二九七六

地物は乾潤を以て其の處を爲して居る、

一二九七七

明は、景なり、

一二九七八

暗は、影なり、

一二九七九

潤は、水なり、

一二九八〇ー八一

乾は、燥なり、而して

一二九八一

乾なる者は天に之く、

一二九八二

暗なる者は地に歸す、

一二九八三

景影は氣を會易に分つ、故に星辰も亦た會易に分る、

一二九八四

水燥は性を會易に分つ、故に雲雨も亦た會易に分る、故に

一二九八五

天なる者は、乾燥光明の處なり、

一二九八六

明暗を相い分つと雖も、而も天に懸る者は、虚動を以て乾燥光明なり、

一二九八七

地なる者は、潤溼暗澹の處なり、

一二九八八

乾潤を相い分つと雖も、而も地に著く者は、實重を以て潤溼暗澹なり、

一二九八九

天物なる者は、常に一體を持し、循環を以て其の期と爲す、

一二九九〇　地物なる者は、毎に其の體を換え、鱗比を以て其の期と爲す、
一二九九一　辰なる者は、会物なり、景中に居る、而して順逆の行は參差す、
一二九九二　星なる者は、易物なり、影中に居る、而して順逆の行は整齊す、
*一二九九三　動なる者は、会物なり、天中に居る、而して能く横行す、（会物　不可解。）
*一二九九四　植なる者は、易物なり、地中に居る、而して能く竪立す、（易物　不可解。）
一二九九五　同じく物を解結塞中に居く、
一二九九六　同じく氣を生化通中に行す、
一二九九七　精は常に其の體を持すれば、則ち古は猶お今のごとし、
一二九九八　麁は毎に其の體を換えれば、則ち今は古に非ざるなり、
一二九九九　天地なる者は、大物なり、
一三〇〇〇　萬物なる者は、小物なり、
一三〇〇一　大小は分有りと雖も。而も同じく是れ物なり。同じく是れ物なれば。則ち
一三〇〇二　同じく其の經の率いるに從う、
一三〇〇三　同じく其の緯の容るるに居る、之を一に有せらると謂うなり。
一三〇〇四　大物は成具を以て。而して經緯の中に成る。
一三〇〇五　成具は絪縕して。小物は化生す。故に
一三〇〇六　小なる者は、大の所有なり、
一三〇〇七　彼なる者は、此の所偶なり、故に

(PB 129)

一三〇八　小の大に於る、資りて成る、
一三〇九　此の彼に於る、依りて立つ、
一三一〇　小の資る所は、廼ち大の給うる所なり、
一三一一　彼の依る所は、廼ち此の通ずる所なり、是に於て。
一三一二　成る者は我に於て足る、
一三一三　立つ者は彼に於て敵す、蓋し
一三一四　成る者は徒に成らず、其の具を得て成る、
一三一五*　立つ者は獨り立たず、其の與を得て依る、
一三一六*　依る者は全たり、二は已に足る、
一三一七*　二なる者は偏たり、一は佗に待つ、故に。
一三一八　立てば則ち彼此相い持す、而して一は一に依る、
一三一九　成れば則ち大小竝び分る、而して各一を成す、是を以て。
一三二〇　萬物は萬天地を有す。以て大物と勢を張る。
一三二一　彼此は相い持す。而して更るがわる其の不足を贍う。是を以て。
一三二二　各散天地は。一有の中に在るも。亦た能く萬不同を爲すなり。故に。
一三二三　其の大より、剖析して其の小を觀る、
一三二四　其の麁より、尋繹して其の精を察す、
一三二五　之を比し之を反す。以て髣髴を觀る。是を以て。

(PB 130)

(I 516b)

一三〇二六　小も亦た各おの一有を發す。而して
一三〇二七　其の徳を有す、
一三〇二八　其の道を發す、
一三〇二九　其の天に居る、
一三〇三〇　其の物を成す、
一三〇三一　日影通具は、彼の衰衰に從いて、而して節序を刻す、
一三〇三二　此れ則ち衰衰と節序とを竝せて、此の時を爲す、
一三〇三三　之に就きて始めて生じ、及ばずして便ち化す、
一三〇三四　天地塞具は、彼の坱坱に依りて、而して方位を鋪く、
一三〇三五　此れ則ち坱坱と方位とを竝せて、此の處を爲す、
一三〇三六　立つ所にして地を得る、
一三〇三七　居る所にして天を得る、
一三〇三八　物は。則ち神體を没して、而して其の氣の神を見す、
一三〇三九　　物體を露して、而して其の氣の本を隠す、是に於て。
一三〇四〇　神なれば則ち天神なり、
一三〇四一　物なれば則ち天地なり、
一三〇四二　神は之を爲す、
一三〇四三　天は之を成す、

天は之を没す、
地は之を露す、
大は則ち素より之を有す、
小は則ち資りて之を有す、
成れば則ち大小は氣物を有して、而して其の勢　相い張る、
立てば則ち彼此は一一を反して、而して其の勢　相い敵す、
資れば則ち大に於て有する者は、皆な小に於て有す、
依れば則ち彼に於て見る者は、皆な此に於て隠る、
大物は、則ち自から中を爲して立ち、自から外を爲して居る、
小物は、中を立する地に依りて立ち、外に居る天を得て居る、
大物は、則ち自ずから理を爲して形を成し、自ずから氣を爲して物を成す、
小物は、則ち其の爲に理せられて形を布き、其の爲に氣せられて物を成す、是れ乃ち
小は諸を大に資りて自から之を有するなり。
大の立するや、佗に假ること無し、
小の立するや、相い依ること有り、
大なれば則ち一中に天地会易を具す、而して以て絪縕す、
小なれば則ち天地会易に絪縕せられ、而して以て一を成す、
水は地に由て止る、

火は膩に由て存す、
植は水無ければ則ち生ぜず、
動は穀無ければ則ち存せず、是れ小の佗に依りて立する所なり、
大は能く天地会易を具す、
小も亦た天地会易を具す、
大は能く本根華實を具す、
小も亦た本根華實を具す、
大は偏を小に於て分つ、而して
小は大に異ならず、是れ物の各自に一を成する所なり、
是に於て。乾潤土石に資りて、而して氣液骨肉有り、
神靈感運に資りて、而して心性爲技有り、
会易を雌雄にす、
天地を身生にす、
保運化持。噫嗡吐納は。資りて成る、
反して立つ、
天は精を以て、而して清浄にして府を爲す、
地は麁を以て、而して穢濁にして藏を爲す、然り而して
時通處塞の天地は、清にして清なり、

一三〇八二　象循質隔の天地は、清にして濁なり、
一三〇八三*　日照し影蔽い、燥煦め水潤おうの中は、濁にして浄す、
一三〇八四*　熱蒸し水漬し、象起り質滅するの中は、濁にして穢す、故に
一三〇八五　濁中。大境は、則ち色性氣性、始めて濁す、
一三〇八六　　小境は、則ち彩聲氣性、漸みて穢す、
一三〇八七　精界は未だ彩聲氣性の窺う可き有らず。
一三〇八八　氣麁にして後、彩聲氣性有り。
一三〇八九　麁中は浄穢を分ちて。而して
一三〇九〇*　大體は浄を爲す、
一三〇九一　小體は穢を爲す、
一三〇九二　浄は色聲氣性を爲す、
一三〇九三　穢は彩聲臭味を爲す、
一三〇九四　浄中は則ち定常の氣を充たす、
一三〇九五　穢中は則ち變化の氣を充たす、蓋し
一三〇九六　天は清濁の素を有し、以て通隔を爲す、
一三〇九七　象は明暗の色を有し、以て照蔽を爲す、是に於て。
一三〇九八　物は隔に由て彩を呈す、
一三〇九九　　通に由て彩を受く、

(PB 133)

照されて其の呈彩を見す、
蔽われて其の呈彩を隠す、
天地は動止を爲す。動く者は清虚を行る、
　止る者は濁實に居る、未だ嘗て相い軋せず。
持中。氣質は相い雑す。以て鬱達を爲す。故に
氣は質に由りて鬱達す、
質は氣に随いて激發す、閒を爲し聲を爲す。
寒乾は氣　淡なり、
潤熱は氣　濃なり、
潤熱の相い醸すに。或は離れ或は著く。

（朱書欄外追記につき削除）

著く者は性を爲す、
離る者は氣を爲す、
天に於て成る、之を氣性と謂う、
人に於て覺す、之を臭味と謂う
彩なる者は、物を持するの氣、之れ達して發するなり、
聲なる者は、質を持するの氣、之れ鬱して發するなり、故に
物は持すれば則ち必ず彩を呈す。是を以て。

(I 517b)

一三一一九　天地日影も。亦た　各　其の物を持すれば。則ち黒白清濁有り。惟だ
一三一二〇　彼は定常を爲す、
一三一二一　此は變化を爲す、濃中は精麁有り。
一三一*二二　而して彩色の辨有り。
一三一二三　聲は色に比すれば。則ち麁小を爲す。故に
一三一二四　彩なる者は、物の持する所、有らざる所莫し、
一三一*二五　聲なる者は、氣の發する所、質と軋して發す、
一三一二六　故に夫れ雷風水火と。金石動植と。
一三一二七　持せざる所無くば、則ち彩を呈せざる所莫し、
一三一二八　軋せざる所有れば、則ち聲を發せざる所有り、
一三一二九　潤熱は質中に相い釀す。之を氣性と爲す。
一三一三〇　氣は昜の爲に發せらる、
一三一三一　性は会の爲に畜えらる、故に。
一三一三二　聲は物を離る、
一三一三三　彩は物に依る、
一三一三四　氣は質を離る、
一三一三五　性は質を畜う、
一三一三六　各おの精麁の分有り。彩聲氣性は。物に於て各有り。

一三一三七　彩は黒白より散ず、
一三一三八　聲は清濁より散ず
一三一三九　氣は浄穢より散ず、
一三一四〇　性は濃淡より散ず、
*一三一四一　熱蒸し潤醸し。各物成る。而して各各彩聲氣性有り。
*一三一四二ー四三　（欄外朱書追記につき削除。）
*一三一四四　故に散じて竟に統無きなり。人の知覺は。
一三一四五　彩は目を以て通ず、
一三一四六　聲は耳を以て通ず、
一三一四七　氣は鼻を以て通ず、　人に於て臭と曰う、
一三一四八　性は舌を以て通ず、　人に於て味と曰う、
一三一四九　故何んとなれば。則ち耳目を假らずと雖も、　而も
一三一五〇　彩聲は則ち自から其の名を持つ、
一三一五一　若し鼻舌を假らずんば、　則ち
一三一五二　氣性は臭味を爲す可からず、　故に
一三一五三　海魚は水に入る可からず、
一三一五四　河魚は海に居る可からず、
一三一五五　酸は紅を和す、

一三一五六　香は穢を逐う、
一三一五七　蓋し清濁なる者は。精麁の分なり。
一三一五八　氣なる者は精、故に清なり、
一三一五九　質なる者は麁、故に濁なり、
*一三一六〇　清なれば則ち其の氣に跡無し、
*一三一六一　濁なれば則ち其の氣に狀有り　是の故に。
一三一六二　持中。機體没露の間、物は實するを以て隔て、動を以て軋む
一三一六三　水火絪縕の中、氣は蒸するを以て薰し、釀を以て畜う　故に
一三一六四　氣は清ければ則ち通ず、濁にして隔つや、彩の成る所なり、
一三一六五　機は清ければ則ち闃す、麁にして触るや、聲の成る所なり、
*一三一六六　氣は清ければ則ち恬たり、麁にして釀すなり、氣の成る所なり、
*一三一六七ー六八　性は清ければ則ち澹たり、麁にして言うなり、性の成る所なり、是の故に。　(I 518a)
一三一六九　精麁絪縕して。通隔闃触。恬釀澹畜を爲す。　(PB 135)
*一三一七〇　通闃恬澹は、混として跡無し、
*一三一七一　隔触釀畜は、粲立して彩聲氣性を立す、
一三一七二　是れ境の清濁を分つ所なり。是を以て。
一三一七三　清なれば則ち天機氣物を立す、
一三一七四　濁なれば則ち彩聲氣性を釀す、

一三一七五（復元）然り而して色は華を發するに成る、
一三一七六（復元）　聲は機に觸るるに成る、
一三一七七（復元）氣は氣に發す、
一三一七八（復元）性は質に畜う、精麁大小の成る所なり。
一三一七九（復元）故に聲色氣性は。天機氣物に釀す。
一三一八〇（復元）我の聲色臭味は。天の彩聲氣性を用うなり。
一三一八一（復元）是れ大境の最も瑣なる者にして。而して小境の最も要なる者なり。故に
一三一八二（復元）物は彩聲氣性を畜う、
一三一八三（復元）動は耳目鼻舌を開く、蓋し
一三一八四（復元）氣體なる者は清なり、
一三一八五（復元）物體なる者は濁なり、
一三一八六（復元）清は素に通じて濁隔に和さず。
一三一八七（復元）故に體氣發露して。各各自ずから彩す。
一三一八八（復元）活氣なる者は動なり、
一三一八九（復元）立體なる者は靜なり、
一三一九〇（復元）大物なる者は、活動　閧す、靜體に軋せず、
一三一九一1復元　小物なる者は、氣物軋激す、各各鳴を爲す、
一三一九一2復元　乾寒は浄を爲す、

*一三一九一3復元　潤熱は穢を爲す、
*一三一九五4復元　火性は水を蒸す、
*一三一九六5復元　水性は火を釀す、是を以て　(PB 136)
*一三一九二　滋液は津津として性を畜う、
*一三一九三　煦熱は蒸蒸として氣を起す、
一三一九四　大は則ち充たざる無し、
一三一九五　小は則ち充たざる所有り、故に
一三一九六　色は則ち有らざる所莫くして、而して彩は則ち偏に其の物に著く、
一三一九七　濁に成して、而して清に成さざるなり、
一三一九八　動は則ち有らざる所莫くして、而して聲は則ち偏に其の物に依る、　(PB 136)
一三一九九　軋に激して、而して動に激せざるなり、
一三二〇〇　臭は熱に起る、
一三二〇一1　味は乾を除きて潤に成る、
一三二〇一2復元　故に彩聲臭味。清靜寒乾の浄を除きて。而して散小の各體に成る。故に
一三二〇二　彩は清に無し、
一三二〇三　聲は閴に無し、是を以て。
一三二〇四　氣は香臭を發すの外に恬なり、
一三二〇五　性は苦甘を釀すの外に淡なり、

一三二〇六　然れども持中の物は。其の本を天の天機氣物に資りて。
一三二〇七　以て此の彩聲氣性を爲すなり。蓋し
一三二〇八　精なれば則ち生化の跡を露せず　壽を悠久に引く　故に清浄なり、
一三二〇九　麁なれば則ち生化の跡を露す　體を旦夕に換う　故に穢濁なり、
一三二一〇　噫　清浄の府に入らずんば。則ち烏んぞ穢濁の物を辨ぜん。　(I 518b)
一三二一一　生と老とを以て。新陳を分つ。
一三二一二　新と敗とを以て。鮮腐を分つ者は。
一三二一三*　是れ穢濁中の浄穢なり。
一三二一四*　（欄外追記につき削除。朱筆。）
一三二一五　生ずる者は必ず長ず、
一三二一六　滅する者は先ず老ゆ、
一三二一七　將に長ぜんとする者は、色澤鮮膩、之に順えば則ち其の聲は朗洞なり、
一三二一八　將に滅せんとする者は、色彩枯澹、之に逆えば則ち其の聲は湮鬱なり、
一三二一九　其の臭味に於るも亦た然り、然り而して　(PB 137)
一三二二〇　人なる者は萬物と竝立す。故に好惡は物と反する有り。故に
一三二二一　人を以て彩聲臭味を斷ずる者は。人に可なるの彩聲臭味なり。故に
一三二二二　雀矢竜涎は、人鼻に可なり、而して
一三二二三*　人屎壞肉は、狗口に可なり

且つ大物の宇宙に在るは。一反一比、偶を得て居る、
没體露體、繼を得て従う　而して

天氣の運は、日月を幹轉す、
地氣の爲は、事物を經營す、
偶繼するは、物なり、經緯を分つ、
運爲するは、氣なり、天地を分つ、然り而して
小物は此の氣物の分に依る。

反すれば則ち物を以て氣に偶す、
比すれば則ち類類相い偶す、
體を没すれば、則ち既にする者は去り、將にせんとする者は來る、
體を露すれば、則ち前なる者は斃れ、後なる者は生ず、
氣は運して日月を幹轉す、
氣は爲して事物を經營す、

大は則ち地を以て天に偶す、小の偶、則ち植は華實を偶す、
大は則ち今を以て古に繼ぐ、小の繼、則ち植は子苗を繼ぐ、
動は牝牡を偶す、
動は子母を繼ぐ、
大は則ち氣を轉じ質を持す、小は則ち植、幹を以て持す、

一三二四
一三二五
一三二六
一三二七
一三二八
一三二九
一三三〇
一三三一
一三三二
*一三三三
*一三三四
一三三五
*一三三六
*一三三七
一三三八
*一三三九
一三四〇
一三四一

一三二四二　動　足を以て行く、
*一三二四三　大は則ち神は運し精は爲す、　小は則ち植　營爲　跡を没す、
一三二四四　動　意技營爲す、
*一三二四五　常に一體を持する者は、體に成壊無し　日月土石は皆な然り、
一三二四六　先後に體を換する者は、體に成壊有り、雲雨動植は同く然り
一三二四七　麁より之を觀れば體を常にする者は、生化せず、
一三二四八　體を換える者にして、而して生化を露す、
一三二四九　精より之を觀れば同一生化、没露　跡を異にするに過ぎず、是の故に。
一三二五〇　宇宙は衮衮たり、
一三二五一　覆載は攸攸たり、
一三二五二　雲雨は倏忽たり、
一三二五三―五四　動植は斯須たり、亦た途の異なるに非ざるなり。故に。
一三二五五　雲雷雨雪、或いは聚り或いは散ず、未だ天に在る者の精なるに及ばず、
一三二五六　艸木鳥獣、或いは結び或いは解く、未だ地を爲す者の實なるに及ばず、
一三二五七　大物は無窮なり、
一三二五八　小物は有窮なり、
一三二五九　經緯は同じく然り、是を以て。
一三二六〇　物の將に結ばんとするや、氣は渾乎として興る、

(PB 138)

(I 519a)

一三二六一　其の將に盡きんとするや、體は頽乎として壞る、故に
一三二六二　上にして雲雷雨雪なり、物を水燥に資る、
一三二六三　下にして艸木鳥獸なり、物を土石に資る、
一三二六四　明暗は天地を上に於て分つ、
一三二六五　水土は天地を下に於て分つ、
一三二六六　天地は愈いよ分る、
一三二六七　生物は愈いよ蕃る、
一三二六八　艸木鳥獸は、燥居す、
一三二六九　魚龍藻樹は、水居す、夫れ
一三二七〇　動植の天地を有するは。氣液骨肉を物にす、
一三二七一　神靈感運を神にす、
一三二七二　偶緇運爲に依る、
一三二七三　彩聲臭味を用う、
一三二七四　植は有意の文を没す、
一三二七五　動は有意の文を露す、
一三二七六　質實の地を同するを以て、其の物を爲すや同なり、
一三二七七　水燥の居を隔てるを以て、其の生を成すや異なり、故に。
一三二七八　毛羽は氣中に生じて、而して氣に活す、水を飲むと雖も、而も水に死す、

一三二七九　鱗甲は水中に生じて、而して水に活す、氣を喰すと雖も、而も氣に死す、
一三二八〇　跡は反すと雖も。嘑喁吐納。飛走游潜。其の理は一なり。
一三二八一　理は一なりと雖も。物は則ち相い隔つ。
一三二八二　資る所有りて竝立するなり。
一三二八三　變せざれば則ち常ならず、
一三二八四　常ならざれば則ち變せず、
一三二八五　明は往き暗は來る、
一三二八六　寒は謝し暑は至す、
一三二八七　常なる者も能く變ず、
一三二八八　變なる者も能く常す、
一三二八九　變ずる者よりして之を推せば、則ち皆な變なり、
一三二九〇　常なる者よりして之を推せば、則ち皆な常なり、惟だ
一三二九一　往く者を常とすれば、則ち來る者は變なり、
一三二九二　來る者を常とすれば、則ち往く者は變なり、
一三二九三　魚の水に潜む、
一三二九四　鳥の天に翔く、
一三二九五　一は常なれば則ち一は變す。故に
一三二九六　植は本を下にし末を上にす、

動は本を上にし末を下にす、
跡は則ち反すと雖も。而も名は則ち資る所有り。
反すれば則ち一を分つ、
同なれば則ち異を合す、
天地を成す者は一なり、
天地に成る者は各なり、
一なる者は此を有す、
各なる者は此に立す、
大の有する所は、則ち小の資る所なり、
各の立する所は、則ち一の成る所なり、故に
大物は萬物を有す、
萬物は大物に異なる、
天地を成す者は一なり、
天地に成る者は各なり、故に
機體象質、聲聲氣性は、天地の成具なり、
氣液骨肉、心性爲技は、人の成具なり、
成具は。則ち一を闕けば則ち其の物に成らざる有り。
天地に成ること有る者は。

(PB 140)

(I 519b)

譬えば鳥と我との如く。松と竹との如し。
彼を闕くと雖も。而も此に於て已に成る。故に
彼我は各おの其の天地を成し。此の大物中に遊ぶ。
彼此は生を異にす　故に其の物や立す、
彼此は交接す　故に其の事や活す、
夫れ人なる者は。萬物中の一物なり、
　各氣中の一氣なり、　是を以て
　天地豎物は。我と竝び立つ、
　我と竝び行く、
此の如きの天地に立す、
此の如きの天神に活す、　故に
其の體は則ち歧然たり。
氣を彩聲氣性に交す、
質を繼偶運爲に接す、
其の神は則ち淳乎として本を保運化持に運し、
　神を情慾意智の氣に爲すを用す、
眇眇の體に局す、
耿耿の智に囿す　夫の意なる者は。

一三三四
索に巧にして、得に拙なり、
一三三五
度に精にして、通に麁なり、是の故に。
一三三六
意を以て物を索む、索めて得ざれば、則ち疑う、
一三三七
智を以て事を度る、度りて通ぜざれば則ち惑う、
一三三八
失得有亡は之を累る。
一三三九
憂悲苦歓は之に繋る。
一三四〇
己を有するに於て隔たる、
一三四一
意を有するに於て塞がる、
一三四二
小物を以て大物に置かず、
一三四三
有意を以て神爲に任せず、
一三四四
終に窺窬して以て天地に觀る。
一三四五
幽明は、氣なり、
一三四六
有無は、物なり、
一三四七
幽明を物に尋ね、
一三四八
有無を氣に繹ぬるも、遠し。
一三四九
幽明を氣に求め、
一三五〇
有無を物に繹ね、
一三五一
有意を無意に於て通じ、

一三五二
一三五三*
一三五四
一三五五
一三五六
一三五七
一三五八
一三五九
一三六〇
一三六一
一三六二
一三六三
一三六四
一三六五
一三六六
一三六七
一三六八
一三六九

無意を有意に於て體すれば、
則ち相い換る者に何ぞ隔てん。
已に生を此に寓す。然り而して
由りて來る所を知らず、
往きて變る所を測らず、
眇眇を須臾に寄す、
耿耿を攸久に窮めんと欲す、
啻に其の死後の知る可からざるのみならず、
生前も亦た之を如何ともする無し、
啻に生前死後の然るにあらず、
此の生も亦た知る可からざるなり、蓋し
此の生爲る。已に其の寓を有す、
亦た其の知を智にす、
其の有は、則ち實に其の有なり、
其の智は、則ち實に其の智なり、
知らず。素より有して、而して今も亦た之を有すか、
素より知りて、而して今も亦た之を知るか、
今 始めて其の寓を得て、以て之を有すか、

(I 520a)

(PB 142)

一三三七〇
一三三七一
一三三七二
一三三七三
一三三七四
一三三七五
一三三七六
一三三七七
一三三七八
一三三七九
一三三八〇
一三三八一
一三三八二
一三三八三
一三三八四
一三三八五
一三三八六
一三三八七

今　始めて其の智を得て、以て之を知るか、
既に其の有を有す、
既に其の智を智にす、是に於て。
有の有せざる所を疑う、
智の知らざる所に惑う、
無なる者は、有の分外なり、
幽なる者は、明の分外なり、而して
幽明は有無に非ず、
有無は幽明に非ず、
外なる者は能く内と反す、
猶お晝の夜を外にし、
夜の晝を外にするがごとし、今
明を執りて以て幽を窺う、
有を執りて以て無を思う、
猶お晝の色を執りて、以て夜の若何んが物を蔽うと疑い、
　夜の色を執りて、以て晝の若何んが明を通ずと疑うがごとし、又た
猶お目を閉じて以て明の所在を尋ね、
炬を秉りて以て暗の所在を探るがごとし、故に

明中に暗を尋ねば、姑く見る所の者を屏けて、
思いを冥晦の中に致し、以て暗を知るに如かず、
暗を知らざれば、則ち其の明を知るも亦た審かならず、
暗中に明を探れば、姑く晦ます所の者を舎て、
思いを明朗の中に致し、以て明を知るべきなり、

（写本からの転記につき削除。）

明を知らざれば、則ち其の暗を知るも亦た審かならず、
明中　明を屏けて暗に通ず、
暗中　暗を忘れて明に通ず、
之を融通と謂う。

明中　思いを暗に致す、其の暗を以て、能く我の在る所の明を知る、
暗中　思いを明に致す、其の明を以て、能く我の在る所の暗を知る、
之を反觀と謂う。

猶お鏡を鑑るの我が身を身の外に體し。
身の外なる者を以て反觀すれば。則ち彼に通じて我を知るがごとし。
通ぜざれば則ち鏡に體すること能わず。
鏡に體すること能わざれば。則ち以て己を知る無きなり。
有を以て無に體し、無を以て有を反觀し

一三三八八
一三三八九
一三三九〇
一三三九一
一三三九二
一三三九三ー九七
一三三九八
一三三九九
一三四〇〇
一三四〇一
一三四〇二
一三四〇三
一三四〇四
一三四〇五
一三四〇六
一三四〇七
一三四〇八
一三四〇九

明を以て幽に體し、幽を以て明を反觀せば、
則ち何の通に病むことか之れ有らん、
今　有を執りて以て無を窺う、
　明を執りて以て幽を窺う、
質を幽明に尋ぬ、
氣を有無に求む、
猶お目を閉じて明を追い、
　炬を秉りて暗を追うがごとし、
釣竿は狐兎を捕うの具に非ず、
瓦缶は鳳鳴を爲すの器に非ず、
苦なりと雖も而も無益なり。
諸を一氣に結ぶ、
諸を一氣に解く、
物の天地を有するは、猶お
車の輪輻を有するがごとし、
車は輪輻無ければ、則ち行く可からず、
物は天地無ければ、則ち立つ可からず、
物の氣を有するは、猶お

(I 520b)

一三四二八　車の御者を有するがごとし、
一三四二九　御無ければ則ち車は用を爲さず、
一三四三〇　氣無ければ則ち物は立つこと有らず、
一三四三一　一氣の應用。猶お心の喜怒哀樂に痕無く。而して
一三四三二　應接盡きること無きがごとし。是を以て。
一三四三三　膏粱を食する者は、其の人や肥ゆ、
一三四三四　糞壤を培する者は、其の苗や長ず、而して
一三四三五　膏粱は人の肌膚に非ず、
一三四三六　糞壤は苗の枝葉に非ず、
一三四三七　惟だ相い依るの間に。彼此の給資するを見る。然りと雖も。
一三四三八　人は死して蘇る可からず、
一三四三九　物は化して收る可からず、
一三四四〇　生化粲立。唯だ混有の一を有す。則ち
一三四四一　解も亦た一氣なり、
一三四四二　結も亦た一氣なり、
一三四四三　生は之を得るに非ず、
一三四四四　死は之を歸するに非ず、
一三四四五　終を始に反すれば、則ち洋洋乎たり、

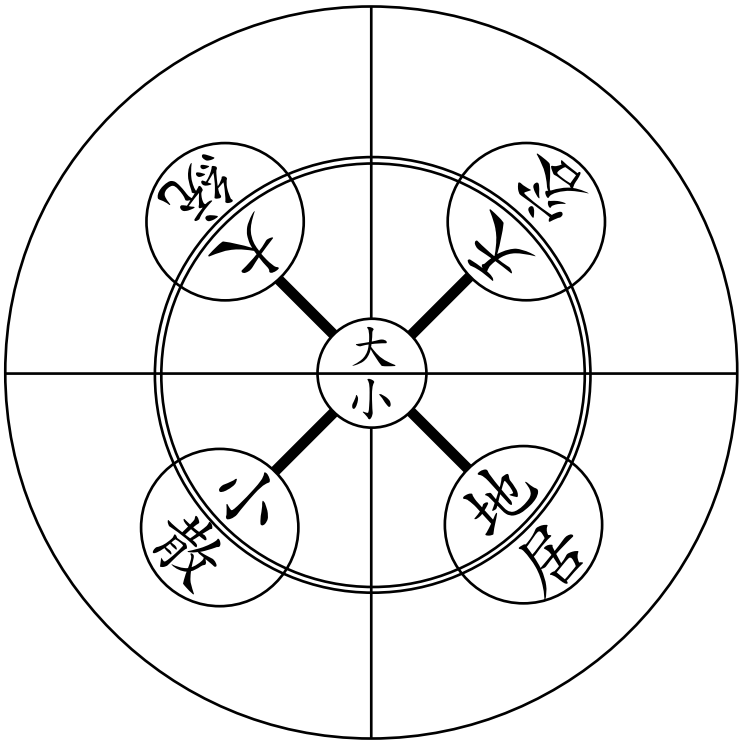
一三四四六　前後を今に求むれば、則ち滾滾然たり、
一三四四七　粲と混と、其の中に機す、
一三四四八　幽と明と、其の間に跡す、
一三四四九　神明何物ぞ。一肉団の氣は一結物なり。
一三四五〇　其の智通を天の氣感に還す。
一三四五一　忘して通じ。通じて化す。
一三四五二　生ずれば則ち生ず、
一三四五三　化すれば則ち化す、
一三四五四*　惟だ其れ然るのみ。孰れか之を蔽塞せん。
一三四五五　生ずる者は生ず、故に之を生と謂う、
一三四五六　化する者は化す、故に之を化と謂う、
一三四五七*　化する者は、生到らざるして化す、
一三四五八　生ずる者は、化行われずして生ず、
一三四五九　生は化を爲す可からず、
一三四六〇　化は生を爲す可からず、故に
一三四六一　生化は迭いに行わるるを得て。而して同じく行わるるを得ず。
一三四六二　動は子を生じ、植は種を生じ、聯綿として已まず、
一三四六三　動は息む、植は斃る、陸續として收らず、

(PB 144)

一三四六四　収る可ければ則ち化に非ず、
一三四六五　已む可ければ則ち生に非ず
一三四六六　生ずる者は必ず化す　其の一なる所なり、
一三四六七　生は必ず化に非ず　其の二なる所なり、

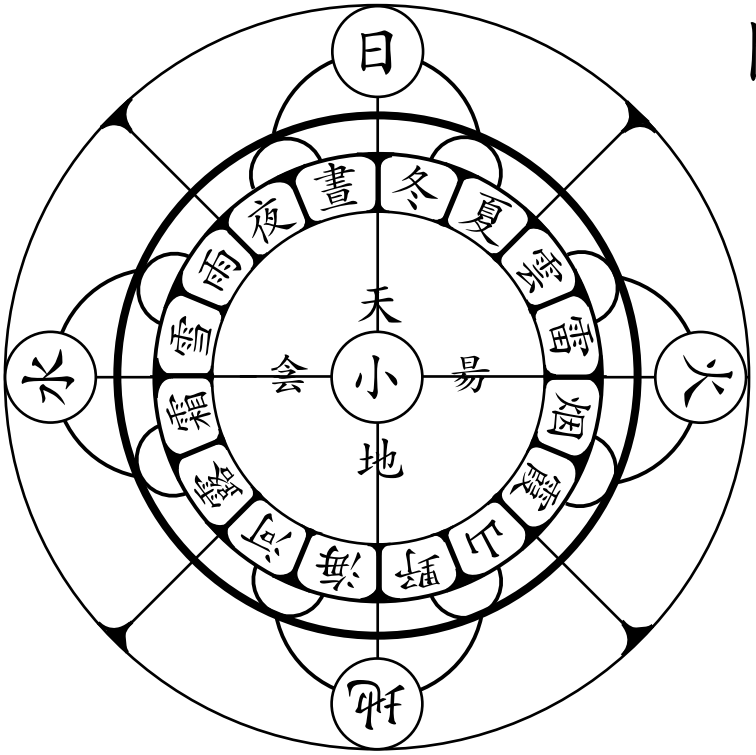
(PB 145, I 521a)

大小圖

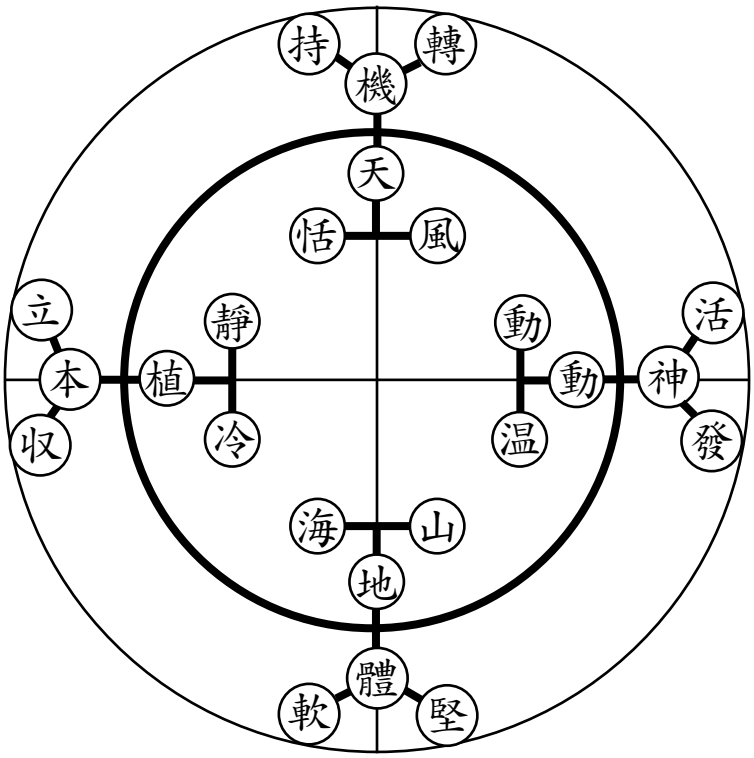


統散容居圖

持中天地圖



天地動植圖



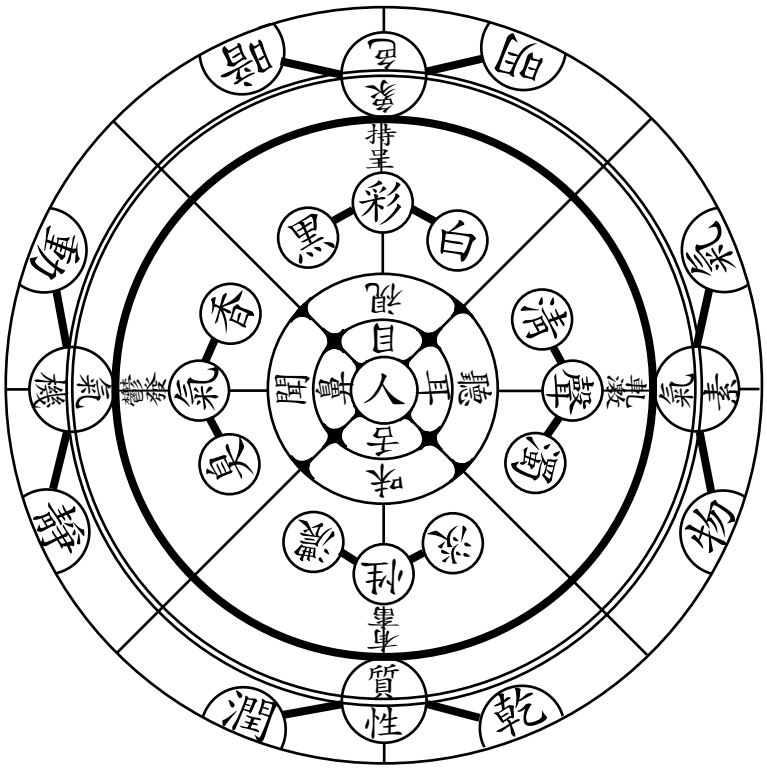
清濁没露圖

造化之技没而露生於動植。動則持意植則捨意故動則牝牡植則華實動則子母植則本苗雖不示意技自有轉動造化之運爲異曲同工。没不隔露。

初筆復元の方針に反するが、朱の図名と補足の文を載せる。

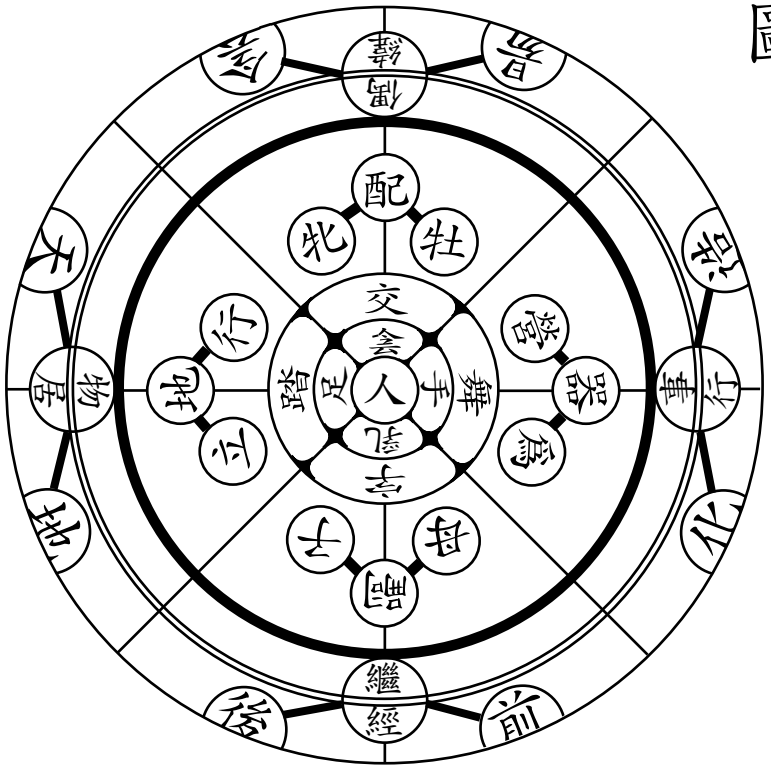
視聽聞味圖

外用與內爲二一合一



初筆復元の方針に反するが、朱筆の図名を載せる。

交字舞踏圖



一三四八三　小物

一三四八四　夫れ轉中の萬物は、日影を以て天地と爲す、

一三四八五　　持中の萬物は、水燥を以て天地と爲す、

一三四八六*　轉中に居るを以て、天物は常に動く、

一三四八七ー八八*　持中に居るを以て、地物は常に止る　是の故に。

一三四八九*　日月は水火を天に於て爲す、迸りて散ずる者は、易にして星漢なり、

一三四九〇ー九一*　水燥は天地を地に於て爲す、分れて散ずる者は、上にして雲雨なり、

一三四九二*　　会にして月辰なり、

一三四九三ー九四　蓋し天物なる者は、箇箇圓成なり、易象は影に居りて光を發す、

一三四九五　　下にして動植なり、

一三四九六　　会象は景に居りて光を受く、

一三四九七　易象なる者は星漢にして、東運は至って微なり、轉と伴うが如し、

一三四九八ー九九　会象なる者は辰沫にして、東運は甚だ速きなり、遲速留退す、

一三五〇〇　地物なる者は、箇箇異形なり、易質なる者は天に在りて清を爲す、

一三五〇一　　会質なる者は地に在りて濁を爲す、

一三五〇二　易質なる者は雲雨なり、升降最も著るし、横旋は客氣なり、

一三五〇三*　会質なる者は動植なり、横竪最も著るし、升降は客氣なり、

蓋し天なる者は、杳渺にして測驗に闕くる有り、明を發して東行に勝る、

暗を含んで運行に勝る、

清を以て竪動を爲す、

濁を以て横動を爲す、

地なる者は、撫摩にして交接に熟する有り、故に
一三五〇五　其の説や。天を略し地を悉す。蓋し
一三五〇六―〇七　大は轉持覆載有り、此れも亦た風恬水陸有り
一三五〇八　風恬水陸は天地を開く、而して
一三五〇九　雲雷雨雪は象質を爲す、
一三五一〇　絪縕摩盪して。物は其の間に化す。
一三五一一　物の其の間に化する。其の體を毎換し。
一三五一二　成敗を以て鮮腐を爲す。蓋し
一三五一三　小なる者は居りて資る、
一三五一四　大なる者は容れて給す、是に於て
一三五一五　轉は則ち理を規矩に於て成す、
一三五一六　持は則ち理を横竪に於て成す、
一三五一七　此に理を資るを以て。而して恬は立ちて風は旋る、
一三五一八　山は峙して海は俯す、
一三五一九（復元）　是の故に物の其の間に成るや。横竪大小。變化は盡きず。
一三五二〇（復元）　神爲の妙と雖も。亦た資給の中に居る。
一三五二一（復元）　是を以て。風恬水陸の間。上は雲雨有り、
一三五二二（復元）　下は動植有り、

動は偏に神を專らにす、
植は偏に本を專らにす、故に (PB 156)

一*三五二三（復元）動は則ち質を以て動す、神を以て營す、故に其の體は則ち温かし、其の神は則ち意を爲す、
一*三五二四（復元）植は則ち質を以て止る、本を以て運す、故に其の體は則ち冷たし、其の神は則ち意を没す、
一*三五二五（復元）動は則ち内を虚にして天中に横行す、
一*三五二六（復元）植は則ち内を實して、地中に竪立す、
一*三五二七（復元）生に動植有り。類を堅輭に剖く、
一*三五二八（復元）處を水燥に分つ、故に植は則ち堅植輭植なり、
一*三五二九（復元）動は則ち堅動輭動なり、而して
一*三五三〇（復元）水陸相い有れば。則ち其の數は相い乘す。
一*三五三一（復元）堅植は則ち土石なり、土は鹵を發し、石は金を収む、
一*三五三二（復元）堅動は則ち介甲なり、甲は龜蟹を分ち、介は螺蛤を分つ、
一*三五三三（復元）輭植は、則ち陸にして艸木なり、
一*三五三四1復元
一*三五三四2復元　水にして藻樹なり、
一*三五三四3復元　輭動は、則ち陸にして鳥獣なり、
一*三五三四4復元　水にして魚龍なり、
一*三五三四5復元　輭は則ち氣に勝る、
一*三五三四6復元　堅は則ち質に勝る、
一*三五三四7復元

一*三五三四８復元　大物は、氣を外にして質を内にす、故に
一*三五三四９復元　内は土石を以て固し、外は運轉を以て保す、
一*三五三四１０復　小物は、質を外にして氣を内にす、故に
一*三五三四１１復　外は皮肉を以て固し、内は營衛を以て保す、
一*三五三四１２復　土氣は表に解く、故に氣物は發生に饒かなり、
一*三五三四１３復　石質は下に結ぶ、故に質物は収凝に成るなり、
一*三五三四１４復　天物は景影に居る、
一*三五三四１５復　地物は水燥に居る、
一*三五三四１６復　動植の生、
一*三五三四１７復　堅輭の類、
一*三五三四１８復　水燥は相い隔つと雖も。亦た各有り。
一*三五三四１９復　各有ると雖も。富乏無きこと能わざるなり。
一*三五三四２０復　動植は各堅輭有り、而して又た水燥有り、是を以て。
一*三五三四２１復　輭生は、水陸各富む、
一*三五三四２２復　剛生は、水陸偏りて富む、
一*三五三四２３復　水陸の動植は各二つなり。鳥獣なり魚龍なり、
　　艸木なり藻樹なり、
一*三五三四２４復　堅動は二つなり、螺蛤なり龜蟹なり水に富む、

一*三五三四二六復　堅植は二つなり、土鹵なり、金石なり、陸に富む、

一*三五三四二七復　蓋し天地轉持の體は。虛實剛柔を爲す。

一*三五三四二八復　風恬水燥の形は。以て橫竪俯立を爲す。

一*三五三四二九復　水なる者は橫質なり、氣は下に鬱して、而して水は上に和す、

一*三五三四三〇復　山なる者は竪質なり、燥は下に煦して、而して氣は上に達す、

一*三五三四三一復　氣は下に鬱す、故に其の植は鮮少なり、水は上に和す、

一*三五三四三二復　故に其の動は蕃滋なり、燥は下に和す、

一*三五三四三三復　故に其の植は衆多なり、氣は上に達す、

一*三五三四三四復　故に其の動は鮮少なり、是の故に。

一*三五三四三五復　動は水に多し、而して燥に少し、

一*三五三四三六復　植は燥に多し、而して水に少し、

一*三五三四三七復　水物は吐納を以て息を爲す、

一*三五三四三八復　陸物は噓嗡を以て息を爲す、

一三五三五　鳥獸艸木は、竪中に在りて而して其の體は立つ、

一三五三六　魚龍藻樹は、橫中に在りて而して其の體は俯す、然り而して

一三五三七　動行は迂曲なり、

一三五三八　竪立は邪長なり、

一三五三九　動なれば則ち其の體は橫俯す、

一三五四〇　植なれば則ち其の體は竪立す、而して
一三五四一　其の中も又た各おの俯立して相い偶す。
一三五四二　細かに其の錯綜する所を觀れば。則ち
一三五四三　水動の伏は、伏して潛むと雖も、而も寢る無し、時有りて跳躍す、
一三五四四　燥動の立は、立ちて行くと雖も、而も寢る有り、時有りて坐す、
一三五四五　鳥は横に翔びて竪に寐る、
一三五四六　獸は竪に行きて横に寢る、且つ
一三五四七*　鳥は天氣に資ること多し、故に羽輕くして飛ぶ、飲むこと少くして尿せず、
一三五四八　獸は地氣に資ること多し、故に質重くして走る、飲むこと多くして尿す、
一三五四九　魚は虚氣を受くること多し、水に因りて息を爲す、
一三五五〇　龜は實氣を受くること多し、氣を閉じて潛む、
一三五五一*（復元）　動植は地を發して天に居す、
一三五五二*（復元）　土石は氣を結んで地に凝す、故に動植は、虚質なり、
一三五五三*（復元）　土石は、實質なり、
一三五五四*（復元）　天なる者は虚動なり、故に物を没す、
一三五五五*（復元）　地なる者は實靜なり、故に物を露す、
一三五五六*（復元）　物を没するの故に、之を虚と謂う、
一三五五七*（復元）　物を露するの故に、之を實と謂う、故に

一*三五五八（復元）　地體なる者は實露なり。以て土石を爲す。石は地に於る骨なり、
一*三五五九（復元）　土は地に於る肉なり、
一*三五六〇（復元）　土石は則ち實止の體なり。虚動と。對して天地を爲す者なり。
一*三五六一（復元）　而して土石と謂うは。以て動植の中に。堅輭の一種を爲す者なり。
一*三五六二（復元）　何ぞや。土石は固に地體の堅輭なり。
一*三五六三（復元）　然れども持中は。虚質を地表に聚む、
一*三五六四（復元）　實質を地中に結ぶ、
一*三五六五（復元）　地體の土石を爲すや。生化は跡を没し。虚動の攸遠を爲すと伍するなり。
一*三五六六（復元）　故に其の物は精華を發し。而して地面に凝結し。以て解結の跡を爲す。
一*三五六七（復元）　彼の生化の跡を没する者と異なるなり。解結は已に跡を爲す。生物に非ずして何ぞ。
一*三五六八（復元）　此の故に。土は鹵を發し、石は金を収む、故に骨肉を爲す者は。根幹なり。
一*三五六九（復元）　解結に跡無し。金石土鹵なる者は。其の華實。以て解結を露す。
一*三五七〇（復元）　土鹵は未だ形を成さず。金石は已に質を結ぶ。
一*三五七一（復元）　蓋し地中の物を爲す。水火なり。水火は会易を有す。土鹵も亦た会易を有す。
一*三五七二（復元）　易土は火を得て燃ゆ、
一*三五七三（復元）　会土は水を得て親しむ、故に
一*三五七四（復元）　鹽は磽硼の鹵を消し、鹹自り結ぶ、
一*三五七五（復元）　硫は硝脳の鹵を礬し、膩自り結ぶ、

一*三五七六（復元）　金鐵は火を見て融け、
一*三五七七（復元）　玉石は火を見て砕ければ、則ち此れも亦た土と性を同じくするや觀る可し。
一*三五七八（復元）　堅輭の生は。均しく是れ生化すと雖も。艸木能く生ず、
一*三五七九（復元）　　金石能く結ぶ、
一*三五八〇（復元）　氣の結ぶ所は。則ち能く石質を爲す。亦た虚實を隔てず。故に
一*三五八一（復元）　或は以て天中に結ぶ、
一*三五八二（復元）　或は以て雷中に結ぶ、
一*三五八三（復元）　知らざる者は謂う。氣は沙土を擁し。天間に鑄冶すと。
一*三五八四（復元）　或は。隕て石を爲す者は。乃ち天上の星なりと謂う。是れ皆な人工を以て天を窺うなり。
一*三五八五1復元　此の故に鍾乳浮石は、水の結なり、
一*三五八五2復元　　玄精凝水は　鹹の結なり、
一*三五八五3復元　詎んぞ彼の土石を用いん。陶冶して而して後　結んで成らん。
一*三五八五4復元　楠榧は木自りして結ぶ、
一*三五八五5復元　牛黄狗寶　自ら病みて結ぶ、
一*三五八五6復元　今蜂蟻の琥珀に居る、
一*三五八五7復元　　華葉の石中に生ず、
一*三五八五8復元　空青禹糧は水自り質を結べば。則ち結の跡　繹ぬ可きなり。
一*三五八五9復元　結の堅にして麁なる者は、乃ち石と爲す、石は麁密を分ちて、石と爲し玉と爲す、

一*三五八五10復　結の輭にして精なる者は、乃ち金を爲す、金は堅輭を分ちて、金と爲し鐵と爲す、
一*三五八五11復　銀朱胡粉は、金の火化に由て鹵を爲すなり、
一*三五八五12復　磁器陶瓦は、土の人工に由て石を爲すなり、
一*三五八五13復　焼灰は、木の火化に由て鹵を爲すなり、
一*三五八五14復　乳香乾漆は、液の風化を經て塊を爲すなり、
一*三五八五15復　石なる者は、麁體なり、
一*三五八五16復　金なる者は、精體なり、
一*三五八五17復　丹緑垢磁は、金にして麁なり、
一*三五八五18復　水晶寶石、瑪瑙臘石は、石にして精なり、
一*三五八五19復　滑石石脂は、鹵に幾し、堊赭、石灰、黒土は、土に幾し、
一*三五八五20復　土の。植は、黏にして堅なり、
一*三五八五21復　墳は、脆にして輭なり、
一*三五八五22復　石は、堅にして脆なり、
一*三五八五23復　金は、輭にして黏なり、
一*三五八五24復　至輭の極は、水銀に至る、
一*三五八五25復　至堅の極は、金剛に至る、
一*三五八五26復　地なる者は。塊然として中處す。土石は植に漸んで。未だ地體を離れず。
一*三五八五27復　故に其の形を塊然にして。未だ之を歧に開かず。石は已に定體を爲す。

(PB 160)

一*三五八五二八復　而して未だ定形を爲すを離れず。已に定形有らず。則ち他と寓似せざること能わず。

一*三五八五二九復　故に石にして理形の變を極む。是を以て。石理は、或は日月山川を爲す、或は艸木鳥獸を爲す、

一*三五八五三〇復　石形は、天工の萬品に肖る、又た人工の器械に狀す、

一*三五八五三一復　是れ乃ち石の體なり。蓋し堅輭の動植。動は有意を爲す、植は無意を爲す、

一*三五八五三二復　輭體は以て形を歧す、

一*三五八五三三復　堅體は以て形を塊す、

一*三五八五三四復　堅植は、金石土鹵なり、

一*三五八五三五復　輭植は、艸木藻樹なり、

一*三五八五三六復　輭動は、鳥獸魚龍なり、

一*三五八五三七復　堅動は、螺蛤龜蟹なり、

一*三五八五三八復　輭生は肉を主とす、

一*三五八五三九復　堅生は骨を主とす、

一*三五八五四〇復　螺蛤は最も塊然たり、變は則ち貝蝮等の形を爲す、

一*三五八五四一復　龜蟹は亦た能く塊然たり、蟹鰕は則ち漸く其の形を開く、

一*三五八五四二復　動植は。水陸に各居りて。而して堅動は水を親しむ、

一*三五八五四三復　堅植は燥を親しむ、

一*三五八五４６復　動の堅輭は、則ち骨肉迭に内外す、
一*三五八五４７復　植の堅輭は、則ち枝幹相い有無す、而して
一*三五八五４８復　水は堅植無きに非ず、珊瑚樹、石闌干、枝幹存して華葉無し、
一*三五八五４９復　陸は堅動無きに非ず、石螺、石蛤、形體具して精神無し、
一*三五八五５０復　堅植は、形を開きて柔植に漸めば、則ち珊瑚樹石闌干なり、
一*三五八五５１復　堅動は、神を舎てて堅植に漸めば、則ち石螺石蛤なり、
一*三五八五５２復　且つ聞くに。石植の華を開く者、
一*三五八五５３復　大螺の山に在る者有れば、
一*三五八五５４復　則ち水陸も亦た各相い雑す。然りと雖も。彼は之を常とし、此は之を變とす、
一*三五八五５５復　條理の道。分るれば則ち粲然として類を隔つ、
一*三五八五５６復　合すれば則ち混然として物を通ず、故に。
一*三五八五５７復　一動一植は、陸に居し水に居す、物の分るる所なり、
一*三五八五５８復　水陸動植は、或は漸み或は合す、物の合する所なり、故に
一*三五八五５９復　品類を以て、而して其の擾擾を理す、
一*三五八五６０復　漸合を以て、而して其の統を觀る、
一*三五八六　天地の具する所。萬物は茲に資る。
一三五八七　資れば則ち之を全にすること有るが如しと雖も、
一三五八八　剖けば則ち之を偏にする所有り、

一三五八九　相い反す。
一三五九〇　相い應ず。
一三五九一　相い之く。
一三五九二　相い漸む。
一三五九三　本生有り、
一三五九四　餘生有り、
一三五九五　天地を同くする有り、
一三五九六　天地を別にする有り、
*一三五九七　細かに神爲の妙を悉す。故に
一三五九八　動植は。其の形を塊歧にす。
一三五九九　其の物を横竪にす。
一三六〇〇　其の體を虚實にす。
一三六〇一　其の氣を溫冷にす。
一三六〇二　本末は彼此を異にす。
一三六〇三　神本は相い長短す。
一三六〇四　緯偶に牝牡華實有り、
*一三六〇五　經繼に子母子苗有り、
一三六〇六　鳥獸、類を横竪に分つ、

一三六〇七　艸木、類を小大に分つ
一三六〇八　小輭大堅、
一三六〇九　横重堅輕、
一三六一〇　鳥竪獣横、艸小木大、大分有りと雖も、
*一三六一一　錯雑　還って相い結ぶ、故に
一三六一二　獣の類は、竪は人寓を分つ、
一三六一三　横は猫狗を分つ、
一三六一四　大は牛馬を分つ、
一三六一五　小は貂鼠を分つ、
一三六一六　鳥の類は、竪は鶴鷺を分つ、
一三六一七　横は鷹鸇を分つ、
一三六一八　大は鶏雉を分つ、
一三六一九　小は鳩雀を分つ、
一三六二〇　陸生は文に富む、
一三六二一　水生は文に乏し、
一三六二二　文に富むを以て、而して鳥獣は猶お陸を以て水に漸むがごとし、
一三六二三　横竪の間。竪に人寓有り、
一三六二四　横に虎駄有り、

(I 522a)

(PB 162)

一三六二五　人に人猌の類有り、
一三六二六　寓に猿狨の屬有り、而して
一三六二七　此れ重に彼れ輕なり、
一三六二八　此れ顖に彼れ愚なり、
一三六二九　虎に虎豹の別有り、
一三六三〇　駄に牛馬の分有り、而して一重一輕なり。
一三六三一　輕き者は猛し、
一三六三二　重き者は力す、
一三六三三　人類なる者は、倮體穎性にして、而して技は智巧に在るなり、
一三六三四　寓類なる者は、被毛性黏にして、而して技は輕捷に在るなり、
一三六三五*　虎類なる者は、肢指に技有り、猛にして利觜尖爪有り、
一三六三六　駄類なる者は、蹄を以て爪に代う、強にして牙を含み角を戴く、
一三六三七　虎豹。豺狼。熊羆。貓犬。狐狸は。虎の類なり。
一三六三八　牛馬。牦驢。犛駱。豬鹿。羊豕は。駄の類なり。
一三六三九　此れ之を大と爲す。而して亦た小類有り。
一三六四〇　其の大なる者を兎蹶の類と爲す。
一三六四一　貂鼬より。鼷鼠に至りて。漸く小なり。
一三六四二　鳥の竪なる者は。鸛鶴なり。鷺鷸と偶す。

一三六四三　鷹鶚烏梟は。猶お獣に虎類有るがごとし。
一三六四四　以て利觜尖爪を具す。
一三六四五　鶏雉鸞鳳は。猶お獣に駄類有るがごとし。
一三六四六　以て大觜長距を具す。
一三六四七　此れ之を大と爲す。而して亦た自から小類有り。
一三六四八　其の大なる者を、鳩鴿の類と爲す、
一三六四九　　小なる者を、燕雀の屬と爲す、
一三六五〇　獣の水に漸む。
一三六五一　海人川童。
一三六五二　水豹臘虎。
一三六五三　海驢海牛。
一三六五四　水鼠海鼠。皆な陸形に従う。
一三六五五　鳥は最も水に漸むに於て富む。
一三六五六　長鵄短尾。矮脚にして蹼。稍や異類の如しと雖も。而も
一三六五七　近似する所有り。故に鵝は好んで蟲豸を食し。夜鳴　更に應ず。
一三六五八　鵞は能く鶏と相い群して。卵　鶏伏を假れば。
一三六五九　則ち其の性は鶏と遠からざるなり。是を以て。
一三六六〇　鳧雁の遠翔。亦た能く地に居す。

漫畫の重身。鴛鴦の文彩。類は愈いよ鷄に近し。
一三六六一*
而して鸕鷀の鷺に近く。海烏の烏に近く。
一三六六二*
海雀の雀に類する。漸水の間にも。亦た自から大小横竪の類有り。
一三六六三
浮を以てする者は。立を用いず。魚を食する者は。猛を用いず。
一三六六四
故に其の類は微なり。是を以て鷺鷸魚鷹の類は。陸形を以て水に居る。
一三六六五*
文に乏しきを以て、而して水生は惟だ魚龍有り
一三六六六*
魚は塊にして龍は歧す、
一三六六七
之を玩べば則ち鱗倮龍鱷に分る
一三六六八
鰭鬣を以って游ぶ者は、水の鳥と爲す、故に鱗倮を統べて、皆な魚なり、
一三六六九
手腳を具して潛む者は、水の獣と爲す、故に龍鱷を統べて、皆な龍なり、
一三六七〇
是に於てか。鳥獣は各鱗倮を有すなり。
一三六七一*
其の間は大小強弱と、微鱗巨鱗の異有りと雖も
一三六七二*
皆な其の體は竪にして、而して鱗を出でざるなり、
一三六七三
其の手腳を生ずるや、鼉と爲し、鯪鯉と爲す、皆な龍類なり、
一三六七四
倮は、則ち海鷃の扁、河豚の圓、
一三六七五ー七六*
杜父の小、海鰌の大、
一三六七七
鰻鱷の長、鮫の痺瘡、
一三六七八
形狀は同じからずと雖も、而も其の體は横なり、而して
一三六七九

一三六八〇　倮に外ならず、而して其の手腳を生ずるや、
一三六八一　鱷と爲し、鯨鮫と爲す、皆な鱷類なり、
一三六八二　鱗の有無を以て之を分てば、鱗一、倮一なり、
一三六八三　手足の有無を以て之を分てば、魚一、龍一なり、
一三六八四　凡そ鱗なる者は卵生なり、
一三六八五　倮なる者は胎生なり、
一三六八六　鱗の鱗を没するは、猶お微鱗の玉屑の如くなる有り、
一三六八七　倮の皮を固くする、終に堅沙の痏瘡を爲す有り、
一三六八八*　而して鱗倮龍鱷は螺蛤龜蟹に併せて合して鱗甲の二種を爲すなり、
一三六八九　艸小木大、鳥竪獣横、大分有りと雖も、錯雑は還って相い結ぶ、故に
一三六九〇　植の類は、竪に笵竹有り、
一三六九一　横に藤蔓有り、
一三六九二　木に喬矮有り、
一三六九三　艸に豊細有り、
一三六九四　陸中は植に富む、
一三六九五　水中は植に乏し、
一三六九六　植に富むを以て、而して艸木は猶お陸を以て水に漸む、
一三六九七　動は能く類を隔つ、

(PB 164)

一三六九八　植は能く類を雑う、
一三六九九　隔てば則ち混ぜず、
一三七〇〇　雑れば則ち相い淆す　是を以て。
一三七〇一　横竪大小。笣蔓卉樹を分つ。
一三七〇二　卉樹は、艸木の正なり、
一三七〇三　笣蔓は　艸木の變なり、
一三七〇四　笣なる者は、竪なり、
一三七〇五　蔓なる者は、横なり、
一三七〇六　卉なる者は、小なり、
一三七〇七　樹なる者は、大なり、而して
一三七〇八　笣蔓なる者は、艸木　各おの其の中に在り、
一三七〇九　卉樹なる者は、其の中　各おの艸木を有す、
一三七一〇　類の雑る所なり。是を以て。
一三七一一　竪は笣を爲す、
一三七一二　横は蔓を爲す、
一三七一三　笣なる者は、竪なり　直にして曲ること能わず、
一三七一四　蔓なる者は、横なり　依りて　立つこと能わず、
一三七一五　艸木の種子は、其の芽を生ずるに皆な下に向う　而して

(I 523a)

一三七一六
一三七一七
一三七一八
一三七一九
一三七二〇
一三七二一
一三七二二
一三七二三
一三七二四
一三七二五
一三七二六
一三七二七
一三七二八
一三七二九
一三七三〇
一三七三一
一三七三二
一三七三三

笣類の種子は、其の芽を生ずるに皆な上に向う
直圓の道を分資する有るに似る。
且つ柔生、皆な皮を以て肉を覆う、惟だ
笣は皮を以て笣を爲し、笣を脱して體を露す、
木を爲せば、則ち虚は竹を爲す、實は椶櫚と爲る、
艸を爲せば、則ち子を結んで牟麦稻粱と爲る
華を吐して茅芒菰蒲を爲す、
葱茖の葉を茎にする、木賊燈艸の茎を葉にする、
水仙燕子の葉を重ぬる。蘭と爲り。薑と爲り。菖蒲と爲り。萬年青と爲る。
皆な笣の變を極むるなり。而して
水に漸めば。則ち萱と爲り。荻と爲る。
皆な竪理を具して而して横文無し。蔓なる者は横植なり。
蔓にして艸、之を蔓と謂う、
蔓にして木、之を藤と謂う、
同じく是れ豆と雖も、而も豇葛は藤蔓を分つ、
同じく是れ蔬と雖も、而も黄瓜 錦荔 葡萄 蔓薁、藤蔓を分つ、
同じく根を豊かにすと雖も而も菝葜仙糧。薯蕷莕蘚は。藤蔓の殊なり。是に於て。
或いは相い有無し。或いは相い比類す。

(PB 165)

一三七三四　弱の變化を盡くすなり。而して水に漸めば。則ち蓴と爲り。菱と爲る。
一三七三五　世は生の藤蔓を分たず、概して之を蔓と言う、
一三七三六　笣の艸木を分たず、之を艸木に於て疑う、
一三七三七　樹は枝葉根幹の條理に正しく、
一三七三八　卉は枝葉根幹の條理に混ず、而して
一三七三九　木なる者は剛大なり、氷雪を亙りて久を保つ、
一三七四〇　艸なる者は柔小なり、春秋を逐いて相い換る、故に
一三七四一　華薹を以て幹を爲す。
一三七四二　鷄冠米囊の如き者有り。根を豊して肉を爲す。
一三七四三　萊菔蹲鴟の如き者有り。根を以って幹と爲る。
一三七四四　款冬芙蕖の如き者有り。枝を以って幹と爲る。
一三七四五　紫蕨　鳳尾の如き者有り。野蒜は子を葉頭に結ぶ。
一三七四六　蘘荷は華を芰外に發す。皆な樹の條理に異なるなり。
一三七四七　其の類の雜なる者は蠶豆　豇豆の。竪を爲し蔓を爲し。
一三七四八　蒴藋接骨の。木を爲し艸を爲すが如き類なり。
一三七四九　枸杞　懸鉤の屬は、樹中に卉す、
一三七五〇　牡丹　棣棠の類は、卉中に樹す、
一三七五一　樹は水に在れば、則ち質を變じて火樹　海松を爲す、

一三七五二　卉は水に在れば、則ち形を變じて藻薀を爲す、
一三七五三　水は動物に富む、故に動は變を水に於て極む、
一三七五四　陸は植物に富む、故に植は變を陸に於て極む、故に
一三七五五　海動は。一胎數萬なり。猶お植實のごときなり。是に於て。
一三七五六　手有り足無きこと。弾塗の如く。
一三七五七　左右を以て。腹背と爲ること。比目の如く。
一三七五八　身を倒にすること章魚の如し。
一三七五九　骨を外にすること龜の如し。
一三七六〇　文を没すること螺蚌の如し。
一三七六一　物に著くこと牡蛎の如し。
一三七六二　毬を爲すこと海膽の如し。
一三七六三　塊然たること水母の如し。
一三七六四　頑然たること海參の如し。
一三七六五　皆な陸變の有せざる所なり。
一三七六六　植に乏しきを以て、而して水生に惟だ藻樹有り、
一三七六七　藻は横にして樹は竪なり、
一三七六八　之を玩べば則ち笣蔓卉樹　分る、
一三七六九　笣蔓卉樹と金石土鹵と、望んで堅輭の二種を爲す、

一三七七〇　根を水底に託すと雖も。而も華葉の水上に在る者は。

一三七七一　陸漸の種にして。而して水植に非ず。

一三七七二　全體を水に潜め。根を沙石に託する者にして。而して乃ち水植なり。

一三七七三　陸植は土に著きて生ず、

一三七七四　水植は石に著きて生ず、

一三七七五　藻は則ち柔輭なり、

一三七七六　樹は則ち堅剛なり、故に

一三七七七　藻は則ち水中の艸なり。

一三七七八　神馬は蔓の如し。菅藻は笣の如し。昆布は萵苣に類す。

一三七七九*　黒目は蔓菁の如し。海松は。卽ち松なり。

一三七八〇―八二　（欄外書き込みにつき削除。）

一三七八三　珊瑚樹の如き。石闌干の如き。屈曲錚錚。華葉を閉ず。

一三七八四　夫の蒙茸の海蘿　陟釐。鷄冠　鹿尾の如き。則ち餘生は苔を爲す。

一三七八五　苔は則ち水に專らにして、而して能く陸に至る、

一三七八六　菌は則ち陸に專らにして、而して能く水に至る、

一三七八七　水底石間、菌を生ず、髣髴として陸産の如し、

一三七八八　石面水際、苔を有す、依稀として水産に似る、

一三七八九　乏しと雖も。鱗介も亦た陸に漸む、

一三七九〇　鱗中の魚龍は、陸漸すれば、則ち蛇と爲り、蟒と爲り、蜥蜴と爲り、守宮と爲る、

一三七九一　倮中の魚龍は、陸漸すれば、則ち鯢と爲り、黿と爲り、蚯蚓と爲り、蚰蜒と爲る、

一三七九二　甲は則ち龜蟹、或いは山棲す、

一三七九三　介は則ち蝸牛夜啼、或いは陸處す、

一三七九四　復元　藻苔も亦た陸に漸む、

一*三七九四1復元　松は女蘿有り、

一*三七九四2復元　薔は垣衣有り、

一*三七九四3復元　乾處は乾にして苔を生ず、

一*三七九四4復元　溼處は溼にして苔を生ず、

一三七九五　復元　然り而して、陸は植の變を極む、

一三七九六　復元　水は動の變を極む、是を以て。

一三七九七　復元　水陸動植。類を分つ可し。而して種は自から無窮なり。

一三七九八　復元　生氣は此に於て盡きず。蓋し

一*三七九八1復元　動は蟲多有り、

一*三七九八2復元　植は苔菌有り、

一*三七九八3復元　蟲は以て飛ぶ、

一*三七九八4復元　多は以て行く、

一*三七九八5復元　苔は以て歧す、

一*三七九八６復元　菌は以て塊す、
一*三七九八７復元　物剖くれば則ち天地剖く。天地の多は。物類の滋き所なり。
一*三七九八８復元　禽獣は、我と天地を同じくす、而して體を異にし氣を類す、
一*三七九八９復元　艸木は、我と天地を同じくす、而して體を反し氣を反す、
一*三七九八１０復　然り而して魚龍藻樹、禽獣艸木、天地反すと雖も。而も體類相い比す。
一*三七九八１１復　餘生の動植は。蟲豸なり、
一*三七九八１２復　　苔菌なり、
一*三七九八１３復　蓋し天地の物を生じて。物又た天地を成す。天地並び立ちて。彼此同じからず。
一*三七九八１４復　餘生の動植は。多く　各の天地に生ず。天地は各なれば。則ち生も亦た異類なり。
一*三七九八１５復　故に蛭蝮蛙螢、泥壌に依る、
一*三七九八１６復　　蚊蚋蜂蠅、艸莽に依る、
一*三七九八１７復　蠢は器物を天地とし。蟫は衣帛を天地とす。菌は朽質を天地とす。
一*三七九八１８復　黴は溼體を天地とし。毛髪は獣身を天地とす。羽翮は禽身を天地とす。
一*三七九八１９復　羽毛は、動の植なり、
一*三七九八２０復　華葉は、植の植なり、
一*三七九八２１復　蚘は　動の動なり、
一*三七九八２２復　蛄蜳は、植の動なり、
一*三七九八２３復　故に瓜の天地無ければ、則ち　蠉　無し、

苗の天地無ければ、則ち　蝨　無し、

一*三七九八二四復

豈に其の物を天地とせずして生ずと曰うを得んや。

一*三七九八二五復

天地は愈よ多し　物類は愈よ滋し、

一*三七九八二六復

物類は愈よ滋し　天地は愈よ多し

一*三七九八二七復

蓋し苔菌蟲豸は。餘生なり。餘生は水陸各有り。

一三七九九

同じく是れ蟲なりと雖も　一は則ち堅體なり　一は則ち輭體なり、

一三八〇〇

同じく是れ豸なりと雖も　一は則ち腳を用う　一は則ち腳を去る

一三八〇一

飛ぶ者は、蟲の鳥なり、

一*三八〇一一復元

行く者は　蟲の獸なり、

一*三八〇一二復元

飛べば之を蟲と謂う、

一*三八〇一三復元

行けば之を豸と謂う、

一*三八〇一四復元

飛中の輭は、蚊蠅の一に屬す　蝶蛾の一に屬す、

一*三八〇一五復元

飛中の堅は、螢螫の一に類す、螽螻の一に類す、

一*三八〇一六復元

蚊蠅の屬は　利觜毒尾、蚊と爲す　蚋と爲す　蜻蛉と爲す、赤卒と爲す、

一*三八〇一七復元

蠅と爲す、虻と爲す、蜂と爲す　果蠃と爲す、

一*三八〇一八復元

蝶蛾の屬、堅羽横羽、堅羽は則ち蝶なり、横羽は則ち蛾なり、

一*三八〇一九復元

蝶蛾は則ち其の品多種なり、而して人は總じて蝶蛾と名づく、而して

一*三八〇一一〇復

好蜜の蛾、飲露の蟬、將に蛾を出でざらんと爲す、

一*三八〇一一一復

(PB 168)

(赤卒　赤とんぼ)

一三八〇一一二復　蠃（うりはむし）、蚌（こくぞうむし）、蛂（みずすまし）、蚑（こめつきむし）、叩頭（ほたるるい）、螢類　而して地膽、芫菁（はんみょう）、蜚角（かぶとむし）、蝨の類なり、

一三八〇一一三復　阜螽（ふしゅう）、莎雞（さけい）、螽斯（しゅうし）、蟷螂（とうろう）は一類にして、而して螻蛄（おけら）、蟋蟀（こうろぎ）は　同屬なり、

一三八〇一一四復　行中（こうちゅう）、有足（うそく）は　陸に於て富む、
　　無足（むそく）は　水に於て富む、

一三八〇一一五復　有足（うそく）は　則ち蚤（すなわのみ）、蝨（しらみ）、蟫（しみ）、蟻（あり）、蛛（くも）、蚣（むかで）、蜣蜋（げじげじ）、蝨（はさみむし）、蝣なり

一三八〇一一六復　水漸（すいぜん）して　而して河豚（ふぐ）の蝭（ちょう）の如き　平魚の蝨（しらみ）の如き、
　　望潮魚（いいだこ）の如き　海蜈蚣（ごかい）の如き有り、

一三八〇一一七復　無足（むそく）は　則ち水母（すなわくらげ）、海鼠（なまこ）なり、

一三八〇一一八復　陸漸（りくぜん）して　而して蚯蚓（みみず）の如き　水蛭（ひる）の如き　蛞蝓（なめくじ）の如き　度古（こうがいびる）の如き有り、

一三八〇一一九復　蓋（けだ）し夫（そ）れ　蠶（かいこ）。蠋（あおむし）。蚹蠙（しゃくとり）。蜾蠃（すくもむし）。蟓（ぼうふら）。子子（やご）。水蠆。天蠶（てんしょう）。

一三八〇一二〇復　或（あるい）は艸（くさ）を結（むす）んで懸（かか）る。或は葉（は）を巻（ま）きて藏（ぞう）す。各自名（かくじな）を有（う）すと雖（いえど）も。

一三八〇一二一復　條理（じょうり）自（よ）り之（これ）を觀（み）れば。羽蟲の未（いま）だ化（か）せざる者（もの）にして。別（べつ）に此の類（るいあ）有るに非（あら）ざるなり。

一三八〇一二二復　同（おな）じく是（こ）れ苔（たい）なりと雖（いえど）も　或（ある）いは枝葉（しよう）を生（しょう）じ　或いは衣黴（いばい）を爲（な）す、

一三八〇一二三復　同じく是れ菌（きん）なりと雖も　或いは菌蕈（きんじょう）を爲し　或いは寓類（ぐうるい）を爲す、

一三八〇二　菌（きん）は、一幹（いちかん）にして蓋（がい）を載（の）す、

一三八〇三　蕈（じょう）は、偏形（へんけい）にして物（もの）に依（よ）る、

一三八〇四　寓（ぐう）は、麦蕈（ばくしん）　馬勃（ばぼつ）　柔結（じゅうけつ）す、

一三八〇五　伏靈（ぶくりょう）　豕橐（したく）　剛結（ごうけつ）す、

一三八〇六

一三八〇七

一三八〇八　陸は愈いよ植に富む、則ち
一三八〇九　水は愈いよ動に富む、
一三八〇九1移動　故に水に之く者は、牡蠣石蚫、植の如くにして而して神を含む、
一三八〇九2移動　陸に之く者は、石螺石蛤、動の如くにして而して神を舎つ、故に
一三八一〇　苔種は水に盛ん、
一三八一一　飛蟲は陸に富む、
一三八一二　陸植は、文にして多し、
一三八一三　水植は、素にして寡し、
一三八一四　陸動は、靈にして鮮し、
一三八一五　水動は、癡にして繁し、
一三八一六　類有り分有り、以て其の分を觀る、
一三八一七　相の相い合す、以て其の合を觀る、
一三八一八　（一三八〇九1に戻す）
一三八一九　（一三八〇九2に戻す）
一三八二〇ー二一　其の之く所を觀れば、則ち鐘乳、水銀は、水石相い之く、
一三八二二　櫟樟、不灰は、木石相い之く、
一三八二三　牡蛎、鹽麩は、動植相い之く、
一三八二四　其の合する所を觀れば、則ち、鷰鼠、蝙蝠は、被毛垂肢、宛然として獣なり、

一三八二五（復元）*惟だ枝間に膜有りて、而して肉翅を爲す、翅頭に爪ありて、能く物を鈎す、

一三八二六ー二七　腦肭　海獺は、共に毛に被われ、前鰭を開けば則ち手と爲り、（腦肭　オットセイのこと）

一三八二八　後脚を收めば則ち尾と爲る、（海獺　ラッコのこと）

一三八二九　鰭を開き尾を立れば、則ち手足と爲りて獸なり、

一三八三〇　手脚を收めて游げば、則ち鰭尾と爲りて魚なり、

一三八三一　虛中に在る者は、氣に恬するなり、

一三八三二　實中に在る者は、質に止まるなり、故に

一三八三三　物は潛んで質に在れば、則ち能く生生を爲す、蓋し地の類なり、

一三八三四　火は發して質を出れば、則ち能く化化を爲す、蓋し天の類なり、

一三八三五　火は之を氣中に傳えて益ます熾んに、

一三八三六　物は之を質中に潛めて愈いよ蕃る、

一三八三七　跡は反して理は一なり。是を以て。

一三八三八　鳥獸は、氣物なり、

一三八三九　艸木は、質物なり、

一三八四〇　水は質を結んで、燥は生を煦し、萬物は由りて以て生ず、

一三八四一　燥は居らず、神は守らず、萬物は由りて以て化す、故を以て。

一三八四二　動は神を含みて、天中に生化す、

一三八四三　植は質を持して、地中に生化す、

(I 524b)

(PB 170)

雲雷雨雪は、其の上に聚散す、
時に有し時に亡す。母も無く子も無し、
艸木鳥獣は、其の下に解結す、
先後體を換え、生化相い繼ぐ、
氣氣は感應し。萬物は變化す。
大なる者は感應に跡無し、
小なる者は感應に跡有り、蓋し
小物は彼此偏立す。而して
其の彼此は。或いは物を同くす、
　或いは物を異にす、
物を同くすれば、則ち雌雄牝牡の類なり、
物を異にすれば、則ち風雲動植の屬なり、
體を接し氣を交すれば。則ち同と異と無く。感應を有す。
感應すれば則ち變化有り。
若し彼を執りて以て此を觀、
此に反して以て彼に同じくすること能わずんば、
則ち復た通ずること能わず、
夫れ天地の間。通ぜざる者莫ければ。則ち感應せざる者無し。

一三八四四
一三八四五
一三八四六
一三八四七
一三八四八
一三八四九
一三八五〇
一三八五一
一三八五二
一三八五三
一三八五四
一三八五五
一三八五六
一三八五七
一三八五八
一三八五九
一三八六〇
一三八六一*

一三八六二　我を執りて彼を察せず。
一三八六三　佗に病むなり。是を以て。
一三八六四　氣氣の相い交わる。感應此に成る。是を以て。
一三八六五　氣より質に出没すれば、則ち變幻を幽明の際に於て爲す、
一三八六六　質より氣に出没すれば、則ち妖怪を恍惚の中に於て爲す、
一三八六七　質を以て氣を動かせば、瓦釜は響を生ず、
一三八六八　氣を以て質を動かせば、雷は山嶽を震す、
一三八六九　氣を以て質を感ずれば、木葉は秋に萎む、
一三八七〇　質を以て氣に應ずれば、海珠は望に満つ、
一三八七一　其の性を變ずれば、則ち米は化して蚌と爲り、楠は變じて石と爲る、
一三八七二　其の質を換えれば、則ち蠋は縮みて蛹と爲り、蠶は脱して蛾と爲る、
一三八七三　螺蛤は交わる無し、
一三八七四　金石は自から結ぶ、
一三八七五　分れて其の道を異にす、
一三八七六　合して其の居を同くす、
一三八七七　虚なる者は實ならず、
一三八七八　動なる者は靜ならず、是を以て。
一三八七九　此に有する者は彼に没するなり。是の故に。

(PB 171)

(I 525a)

一三八八〇　角を有する者は牙無し、
一三八八一　翼を有する者は手無し、
一三八八二　孰れか能く之に翼を予えて、以て其の手を奪わん、
一三八八三　之に角を予えて、以て其の牙を奪わん、
一三八八四　牙は卽ち角にして、
一三八八五　翼は卽ち手なるは、反の常なり。
一三八八六　此に全しと雖も。彼に必ず虧くるなり。
一三八八七　一に於て有せられて。而して二に於て反す。故に
一三八八八　鳥は羽を以て手に換え、而して羽は還って身を行るの用を爲す、
一三八九〇　羽を以て身を行れば、則ち腳は把握の用を爲す、是に於て
一三八九一　彼は我の手を腳にす、
一三八九二　我は彼の腳を手にす、
一三八九三　魚は鬣を以て羽に換え、而して鬣は還って身を行るの用を爲す、
一三八九四　鬣は以て身を行れば、則ち尾は還って守禦の用を爲す、是に於て。
一三八九五　魚は鳥の羽を鬣にす、
一三八九六　鳥の腳は魚の尾なり、
一三八九七　鳥は啄を以て主と爲れば、屎を以て尿に換ゆ、（則ち　を欠くか。）
　魚は飮を以て主と爲れば、則ち腮を以て鼻と爲す、

一三八九八　足ると雖も而も偏せざる所莫し、
一三八九九　偏すと雖も而も足らざる所莫し　故に
一三九〇〇　塊然たる金石、
一三九〇一　歧然たる鳥獣、
一三九〇二　彼の無き所、此に充つ、
一三九〇三　此の乏き所、彼に餘す、
一三九〇四　二に於て偏なりと雖も、而も一に於て全し。
一三九〇五　二に於て反すると雖も、而も一に於て足る有り、
一三九〇六　天地は大なりと雖も。動植は微なりと雖も。
一三九〇七　此に於て違うことを獲ざるなり。
一三九〇八　氣は聚まりて物を生ず。
一三九〇九　物は生じて氣を有す。
一三九一〇　氣は以て生を爲す、之を生と謂う、
一三九一一　物は以て體を有す、之を身と謂う
一三九一一*1復元　生は本神の氣を有す、
一三九一一*2復元　身は塊歧の別を有す、
一三九一一*3復元　動は有意を以て神と爲す、
一三九一一*4復元　植は無意を以て神と爲す、故に

一三九一一5復元　植は冷止無意を以て生と爲す、
一三九一一6復元　動は温動有意を以て生と爲す
一三九一一7復元　植は竪立堅剛を以て體と爲す、
一三九一一8復元　動は横行柔輭を以て體と爲す、
一三九一一9復元　動は、氣物なり、地を離れて横行す、牝牡は以て子を生ず、食息は以て身を養う、
一三九一一10復　植は、質物なり、地に著きて竪立す、華實は以て種を生ず、水土は以て體を養う
一三九一二　金石は塊然として本氣に富む。
一三九一三　生化は攸久にして四紀を没す。
一三九一四　螺蛤より龜蟹に至る、
一三九一五　塊然より。歧然に漸む。
一三九一六　艸木は之を堅生に比すれば。則ち歧然として文を爲す。
一三九一七　根幹皮肉は。内外本末を具す。
一三九一八　堅植は塊然として、而して金は礦に生ず、
一三九一九　玉は璞に抱るれば、則ち漸く内外に生ず
一三九二〇　珊瑚樹　石闌干。終に枝幹を爲せば。則ち又た本末を生ず。
一三九二一　輭植は歧然として。而して菌は皮肉を没し、（て。は　て、であるべきか。）
一三九二二　寓は本末を没すれば、則ち塊歧は相い之く、
一三九二三　堅動は塊然として、而して龜蟹は則ち四紀を備う、

(PB 173)

一三九二四　蝡動は歧然として、而して海膽水母、將に其の紀を没せんとす、

一三九二五　鳥獸は已に神氣に富めば。本末内外。又た前後左右を多す。是を以て。

一三九二六　文章の條理は、蝡生の歧に粲然たり、

一三九二七　堅生の塊に曖然たり、

一三九二八　本氣なる者は天成にして、物の本を爲す所以の氣なり、

一三九二九　神氣なる者は神爲にして、物の神を爲す所以の氣なり、

一三九三〇　堅生と我と類を爲すこと疏なり、

一三九三一　蝡生と我と類を爲すこと親なり、

一三九三二　親しきの故に。氣の本神。質の皮肉は。

一三九三三　我と同じく生生を種子に於て繼ぐ。

一三九三四　同じく先後して體を換う。

一三九三五　本神皮肉同じと雖も。而れども亦た有餘不足の相い反する有り。故に

一三九三六　好惡知辨。彼は無意を以てす、

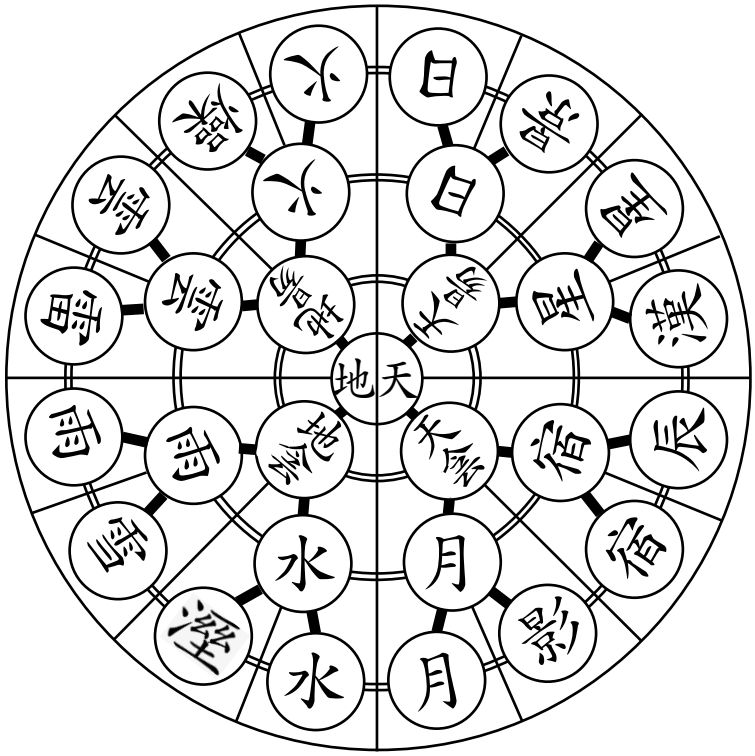
一三九三七　　此は有意を以てす、　(PB 174)

一三九三八　生生の種子は。彼に在りては、實と爲り苗と爲る、

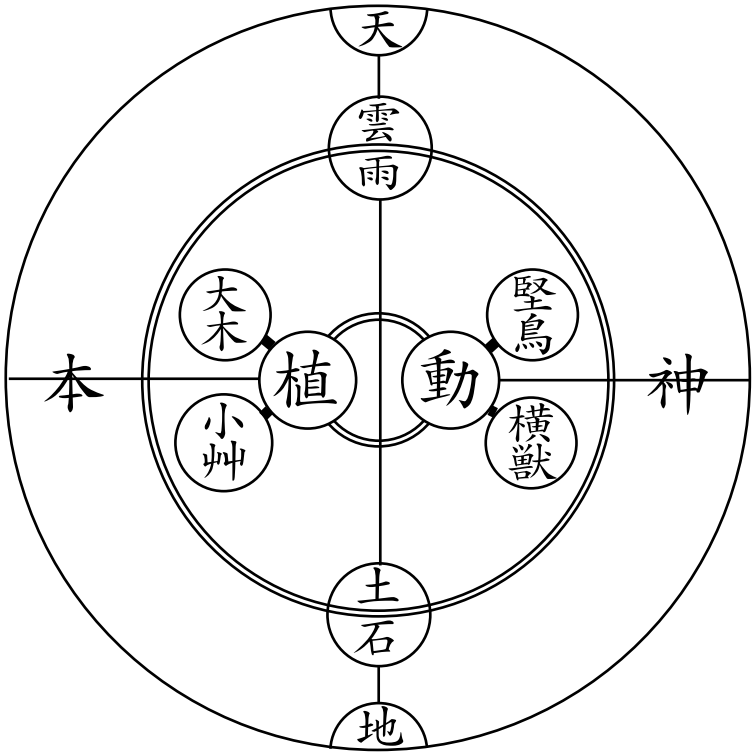
一三九三九　　此に在りては、精と爲り子と爲る　(PB 175)

(I 525b)

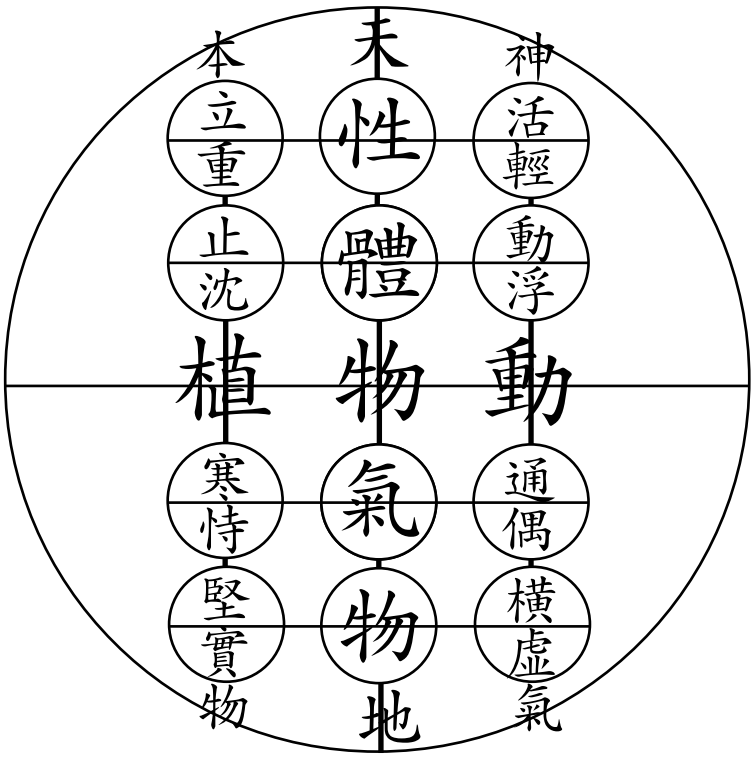
大物爲于絪縕圖



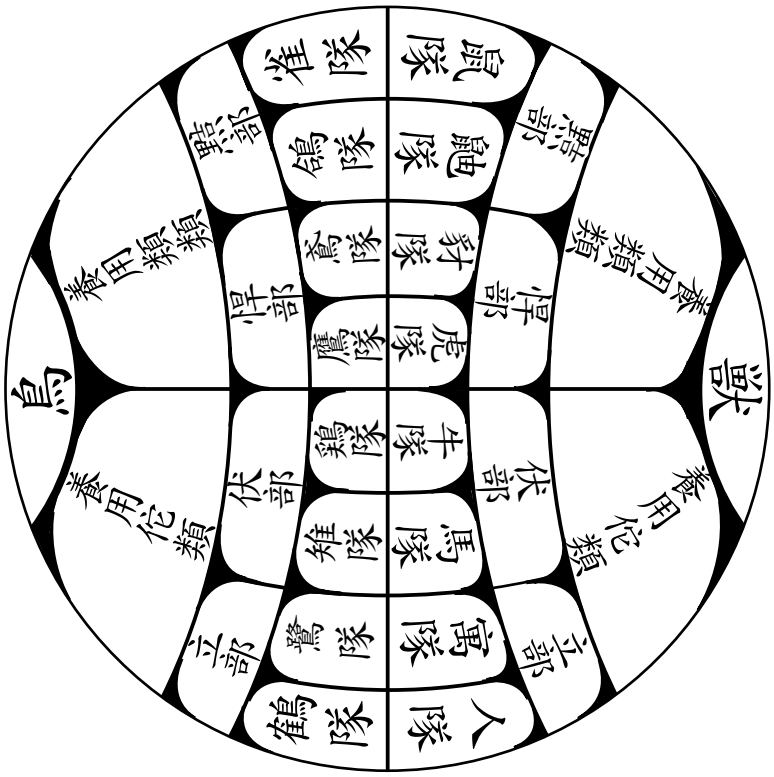
小物成于絪縕圖



動植氣物性體圖

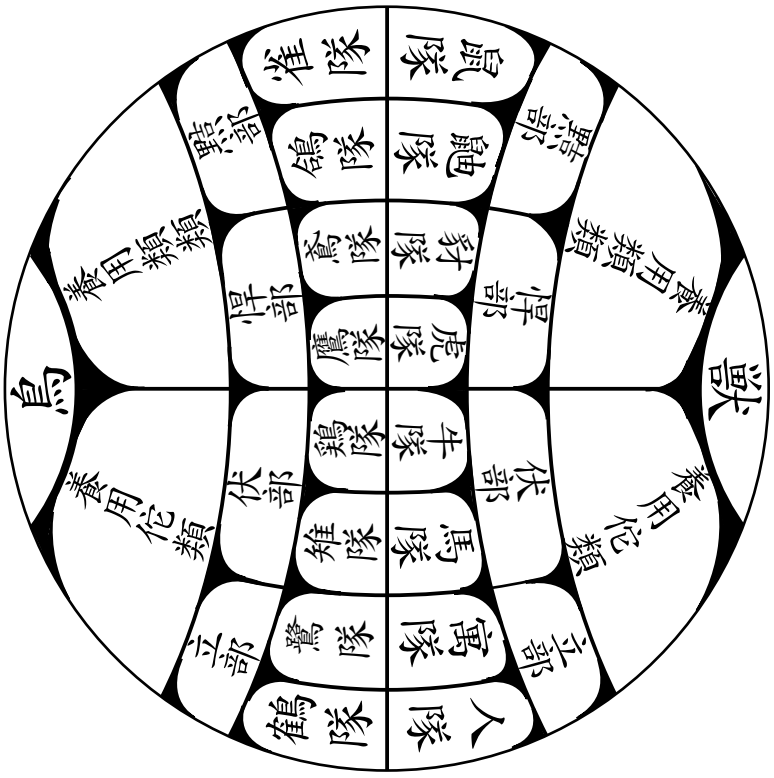


四部八隊圖一合


獸
鼠隊
兎隊
豺隊
虎隊
牛隊
馬隊
寓隊
人隊
鳥
雉隊
鷂隊
鸇隊
鶴隊
鼯部
悍部
伏部
立部
畜用佗類
畜用佗類
畜用佗類
畜用佗類

陸動植

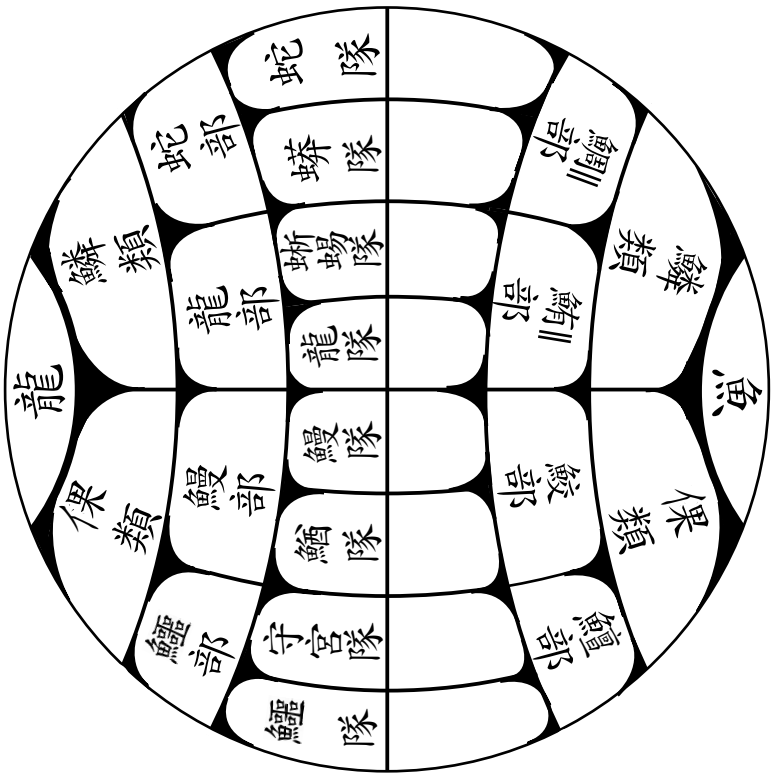
四部八隊圖一合



初筆復元の方針に反するが、訂正を再現する。

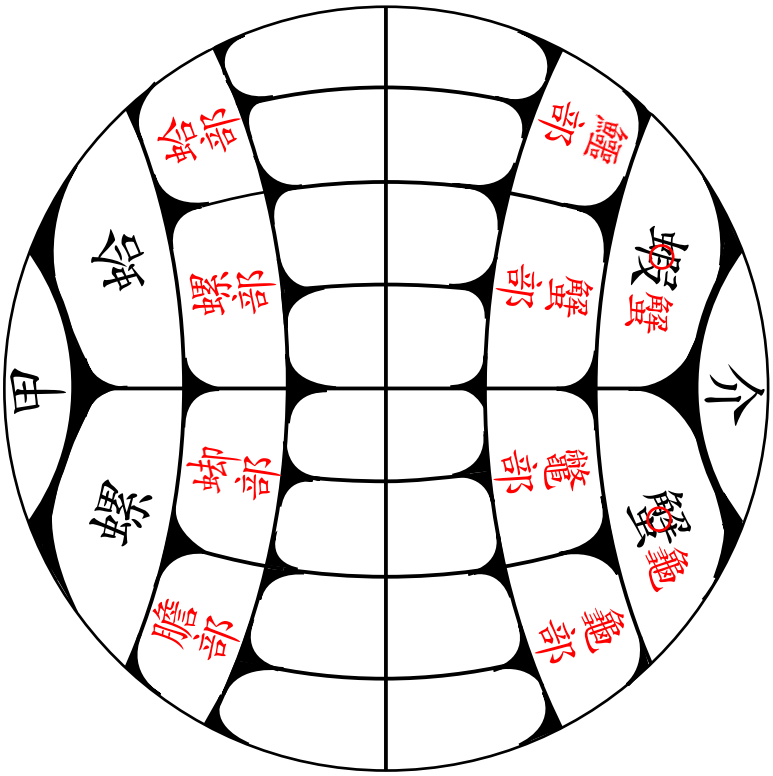
木
變形類
萼部
苞部
閉部
定形類
閉部
苞部
變形類
萼部
艸
定形類
閉部
苞部
變形類
萼部
閉部

水動植圖一合


龍
鱗類
龍部
龍隊
蛇部
蛇隊
蜥蜴隊
蜂隊
鰐部
鰐隊
鱷部
鱷隊
鰭隊
鰓部
鰓隊
守宮隊
鱷部
鱷隊
魚
鰭類
鰭部
鰭隊
鰓部
鰓隊
鰾隊
鰾部
鰾隊
鰭類
鰭部
鰭隊

樹
變形類
包部
櫻欄隊
竹隊
草刈
包部
變形類
藁
蓑部
定形類
開部
閉部
蓑部
定形類
開部
閉部

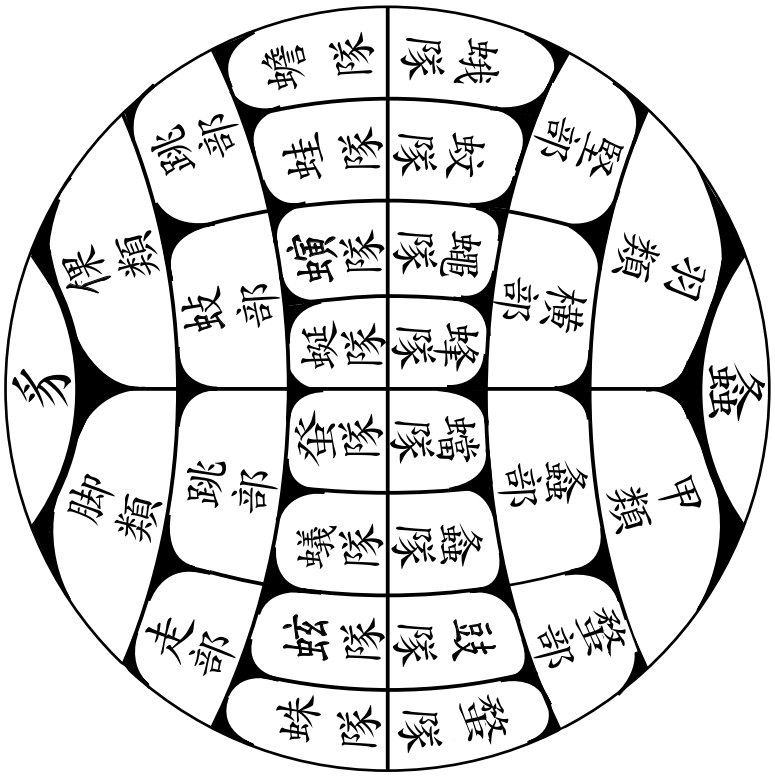
堅動植圖一合



初筆復元の方針に反するが、訂正を再現する。

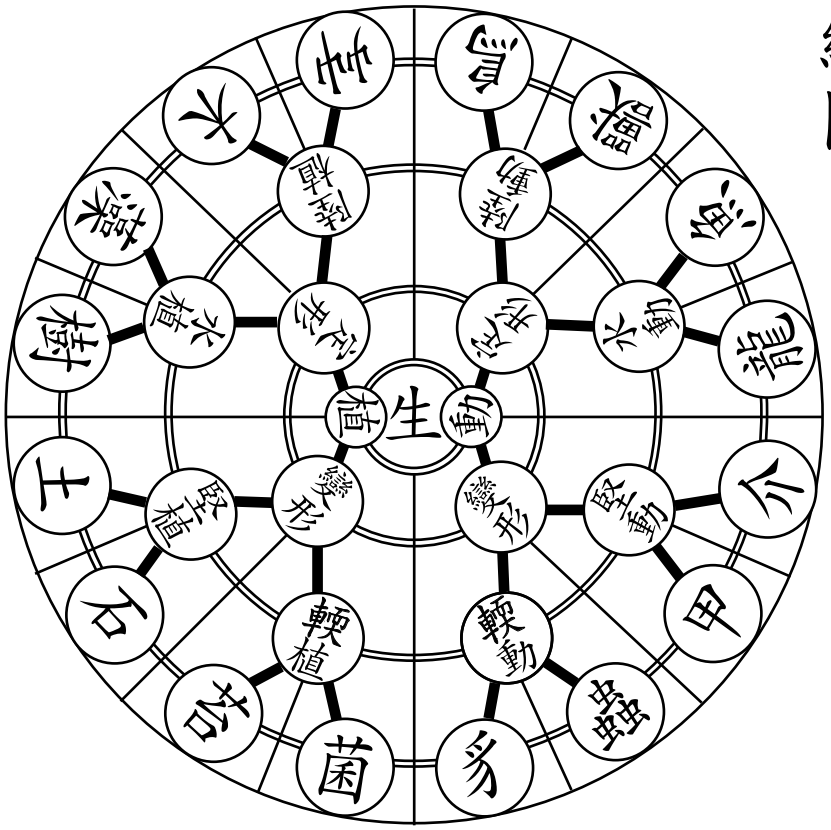
土
窯業部
陶器隊
陶土隊
陶磁器隊
石
石類
玉部
玉隊
石部
丹隊
石隊
金類
鐵部
鐵隊
金部
鉱隊
金隊
銀隊

輓動植圖一合


蟬隊
蜻隊
蜓隊
蜂隊
蛩隊
蟷隊
蟻隊
蛛隊
蟾隊
蚊隊
蟋隊
螽隊
鼓隊
螳隊
蠶隊
蚤隊
蜘隊
蚣隊
蜚部
跳部
翅類
蚊部
跳部
脚類
走部
毆部
蝨部
甲類
螽部
蝨部
翅類
蚊部
跳部
脚類
走部

苔
菌類
菌部
依物綱
苔部
自立綱
蘚部
依物綱
蘚類
自立綱
蘚綱
蘚部
木葉綱
蘚綱
蘚類
蘚部
蘚綱
蘚部
木葉綱
蘚綱
蘚部
木葉綱
蘚綱
蘚部
木葉綱

動植分合總圖



混物

一三九五〇　大は小と異にして。而して有は資と同じからず。然りと雖も。

一三九五一　成る者は應ずる有り、

一三九五二　資る者は給する有り　故に

一三九五三　之を有に資りて歸を一にす、

一三九五四　之を各に成して物を立す、

一三九五五　之を一有に資る、

一三九五六　之を各體に成す、

一三九五七　各物各天地は。終に各其の勢を張る。蓋し

一三九五八ー五九　持中なる者は。濁境なり。其の天は則ち氣は恬に風は動く、

一三九六〇　其の地は則ち山は峙ち水は俯す、

一三九六一　其の昜は則ち燥火なり、

一三九六二ー六三　其の会は則ち水溼なり　而して雲雨は上に出没す、

一三九六四　動植は下に生化す、

一三九六五　雲雨は濁中に浄し、

一三九六六　動植は濁中に穢す、

一三九六七　浄ければ則ち運爲。握歩の跡を没す、

一三九六八　穢すれば則ち絪縕。交字の態を露す。　蓋し

一三九六九　動植なる者は。天地間の小物なり。然りと雖も。
*一三九七〇　我は動中の一物と爲りて。神中の一氣を具し。艸木に依り、天地に立す、
*一三九七一　故に眇たる一氣物。天地を人に於て開き。大物と勢を張る。
一三九七二　植は則ち冷止無意なり、
一三九七三　動は則ち溫動有意なり、夫れ
一三九七四　物は天地を有す、
一三九七五　氣は神本を具す、
一三九七六　動は天物を成す、
一三九七七　植は地物を成す、
一三九七八　動は神氣を專らにす、
一三九七九　植は本氣を專らにす、
一三九八〇ー八一　能く本氣を專らにして、而して地物を成す、故に植、其の神は則ち無意なり、
一三九八二　其の體は則ち地に著く、
*一三九八三ー八四　能く神氣を專らにして、而して地物を成す、故に動、其の神は則ち有意なり、
一三九八五　其の體は則ち天に居る、故に
一三九八六　植體は、則ち内を實にして以て止り、冷を地の寒に資る、
一三九八七　動體は、則ち内を虛にして以て動き、溫を燥の煦に資る、蓋し
一三九八八　大物の有は、上下を以て、而して中外に居る、故に

(I 526a)

一三九八九　小物の資は、本末を以て、而して上下に居る、然り而して
一三九九〇　植は、本を下にし末を上にす、
一三九九一　動は、本を上にし末を下にす、
一三九九二　一に於て有せらる、
一三九九三　二に於て反す、故に
一三九九四ー九五　本氣を以て生を爲すは、則ち彼此同なりと雖も、而れども冷止は我れ之を惡む、
一三九九六　溫動は我れ之を好む
一三九七ー九八　神氣を以て靈を爲すは、則ち彼此同なりと雖も、
一三九九九　有意は我に運す、
一四〇〇〇　無意は彼に運す、　(PB 190)
一四〇〇一　華榮し實種するは、則ち彼此同なりと雖も、
一四〇〇二　彼は質實を以て、物を外に於て取り、生を下體に於て養う、
一四〇〇三　實を上頭に於て結ぶ
一四〇〇四　此は氣虛を以て、物を内に於て取り、生を上竅に於て養う、
一四〇〇五　子を下體に於て生ず
一四〇〇六　生を爲し命を爲すは。則ち彼此同なりと雖も。而れども
一四〇〇七　彼は根より生して、而して命は根に在り、
一四〇〇八　此は首より生して、而して命は首に在り、惟だ
　有意を以て立する者は、有意に事有り、

一四〇九 無意を以て立する者は、無意に事無し　是に於て。
一四一〇 無意は、有意の事に混然たり、
一四一一 有意は、有意の事に粲然たり、
一四一二 既已に粲然たり。視聽聞味。思慮知辨は。
一四一三 其の物を有す、
一四一四 其の事を有す、
一四一五 偏なる者より之を觀れば、彼に無き者は我に有り、
一四一六 全なる者より之を觀れば、彼に混有する者は、
此に粲立す　是の故に。
一四一七 身を有する者は。本末内外を有す。
一四一八 動は外を實にし、植は内を實にす　而して
一四一九 動は上を本にし、植は下を本にす、
一四二〇 本末内外。動植の同じき所なり。
一四二一 有意は向う所有り。向背は前後を爲す。
一四二二 前後有れば。必ず左右を有す。故に
一四二三 前後左右は。有意に分つ、
一四二四 無意に混ず、
一四二五 有意は。視聽聞味。知覺好惡を用う。故に

耳目鼻舌。意智情慾は。有意に分つ、
無意に混ず　是れ
多少の有無の對を成す所なり。
未だ混粲の分を知らず。多少の對に於て泥む。
大物は、塊塊に居りて、而して衰衰に從う　故に
小も　亦た天地に居りて、而して節序に從う　然り而して
植は　華葉を配として、而して子苗に繼ぐ、
動は、牝牡を配として、而して子母に繼ぐ、
大物は、氣　其の物を運し、神　其の事を爲す、故に
小も、亦た氣　其の物を運し、神　其の事を爲す、然り而して
植は、止りて無意に運爲す、
動は、動きて有意に運爲す、蓋し
大なる者は、機體象質なり、諸を風恬水陸に縮す、
諸を彩聲氣性に釀す　故に
動植は　則ち其の風恬水陸に居る、
其の彩聲氣性を用す、
虛を天と爲す、
實を地と爲す、

(PB 191)

一四〇二七
一四〇二八
一四〇二九
一四〇三〇
一四〇三一
一四〇三二
*一四〇三三
*一四〇三四
一四〇三五
一四〇三六
一四〇三七
一四〇三八
一四〇三九
一四〇四〇
一四〇四一
一四〇四二
一四〇四三
一四〇四四

一四〇四五　風は轉旋す、
一四〇四六　恬は持立す、
一四〇四七　質は水を湛う、
一四〇四八ー四九　燥は陸に充つ、故に風恬水陸なる者は、機體象質より成る、
一四〇五〇　清は天を爲す、
一四〇五一　濁は地を爲す、
一四〇五二　靜は彩を呈す、
一四〇五三　動は聲を激す、
一四〇五四　熱は氣を發す、
一四〇五五ー五六　潤は性を收む、故に彩聲氣性なる者は、色性氣性より釀す、
一四〇五七ー五八　是を以て。風恬水陸の境は。則ち彩聲氣性の充つる所なり。故に
一四〇五九　合して之を言えば、動植は、動靜燥溼にして物を爲す、
一四〇六〇　彩聲氣性にして用を爲す、
一四〇六一　分ちて之を言えば、動體は動きて溼なり、能く彩聲氣性を發す、
一四〇六二　植體は止りて燥なり、能く彩聲氣性を收む、蓋し
一四〇六三ー六四　動は。質を取りて内を養なうの時、其の性を舌に於て覺る、之を味と謂う、
一四〇六五ー六六　氣を喩いて内に通ずるの時、其の氣を鼻に於て覺る、之を臭と謂う、故に
一四〇六七　物に於ては、則ち彩聲氣性なり、

一四〇六八　我に於ては、則ち彩聲臭味なり、蓋し一なり。

一四〇六九　大は、則ち成らざる莫く、立せざる莫し、而して

一四〇七〇ー七一　小は、則ち大に資りて成る、物に依りて立つ、(PB 192)

一四〇七二　資れば則ち大に應ず、

一四〇七三　依れば則ち與に感ず、故に

一四〇七四　大物も、亦た本根精英を有す、

一四〇七五　小物も、亦た本根精英を有す、

一四〇七六　本を天と爲す、

一四〇七七　根を地と爲す、

一四〇七八　精は會を成す、

一四〇七九ー八〇　華は易を成す、故に天なる者は、本なり、物は皆な之に資る、(I 527a)

一四〇八一　地なる者は、根なり、物は皆な之に依る、

一四〇八二　精なる者は、會なり、氣を物に於て隱す、

一四〇八三ー八四　華なる者は、易なり、體を氣に於て發す、故に氣は本根精英を藏す、

一四〇八五　物は天地會易を露す、

一四〇八六　天は地中に没す、

一四〇八七　地は天中に露す、

一四〇八八　根を爲す者は止る

一四〇八九ー九〇
一四〇九一
一四〇九二
一四〇九三
一四〇九四
一四〇九五
一四〇九六
一四〇九七
一四〇九八
一四〇九九
一四一〇〇
一四一〇一
一四一〇二
一四一〇三
一四一〇四
一四一〇五
一四一〇六
一四一〇七

本を爲す者は動く、故に天通地塞は本を爲す、
天虛地實は根を爲す、
精は動止を隱す、
英は發收を見す、蓋し
神物の體は。神靈は事を運し、
本根は物に體するを用す、是に於て。
本氣は物を成す、
神氣は事を爲す、
事物なる者は露す、
本神なる者は没す、
天地は則ち本氣の成る所なり、
天神は則ち神氣の成る所なり、
經通緯塞、
動轉靜持、
天虛地實、
易發会收、
此に於てせざる者莫し。故に
大物は、天地なり、

小物は　動植なり、
大物は神本を有せば　則ち
小物も亦た神本を有す、
本氣は、則ち彼此同名なり、
神氣は、則ち彼に神と謂う、
　此に意と謂う、
物　異なるを以て　而して氣　異なり、
氣　異なるを以て　而して名　別なり、
一　剖するを以て　而して氣　應ず、
氣　應ずるを以て　而して名　通ず、
動を有意と爲す、神氣の物なり、
植を無意と爲す、本氣の物なり　而して
神本は相い有し。動植は全成す。
成具は。則ち天神なり、
　天地なり、
　天は則ち定常なり、
　神は則ち變化なり、
變化の地、神靈感運成る、

一四一二六　天は則ち乾明なり、
一四一二七　地は則ち潤暗なり、
一四一二八　潤暗の處は。水燥土石を成す。故に
一四一二九　物は芸芸然たりと雖も。亦た惟だ一動一植のみ。
一四一三〇　動植は。風恬の中に居る、
一四一三一　水土の中に立つ、
一四一三二　神靈の神を成す、
一四一三三　感運の氣を用う、故に
一四一三四ー三五　物は水燥土石に資る、以て氣液の生、骨肉の身を爲す、
一四一三六　潤暗結實。水燥は天に居る、
一四一三七　土石は地を結ぶ、
一四一三八　水燥は則ち雲雨に之く、
一四一三九　土石は則ち動植に之く、
一四一四〇　動植は。生を同じくして物を反す。故に
一四一四一　彼に根幹と曰う、
一四一四二　此に身首と曰う、
一四一四三　動植は物を分つと雖も。而も同じく之を有す。故に
一四一四四　水燥土石は。我に於て得て。而して氣液骨肉なり。

一四一四五　植は骨を欠けば、則ち剛を肉に於て寓す、
一四一四六　血を欠けば、則ち潤を氣に於て寄す、
一四一四七　此は溫動有意なり、
一四一四八　彼は冷止無意なり、是に於て。
一四一四九　其の有意の器は。彼に無くして我に有り。蓋し夫れ。
一四一五〇　人の身を爲すは。氣液骨肉なり。
一四一五一　氣は溫動を分つ、
一四一五二　液は膏血を分つ、
一四一五三　肉は臟腑を分つ、
一四一五四　骨は筋骨を分つ、
一四一五五　膏に和して皮　外に成る、
一四一五六　血に和して肉　内に成る、
一四一五七　皮は能く物を裹む、
一四一五八　肉は能く神を畜う　是の故に。
一四一五九　府なる者は、物を納むるの名にして、皮の別名を爲す、
一四一六〇　藏なる者は、氣を藏するの名にして、肉の別名を爲す、
一四一六一　臟は上體を爲す、
一四一六二　腑は下體を爲す、

一四一六三　上下の體成りて、
一四一六四　神本の氣　分る、
一四一六五　氣は神靈感運に資りて、以て心性の意、爲技の爲を爲す、
一四一六六　體の大分は、天なり、地なり、
一四一六七　人なる者は、地中の一小物なり、故に
一四一六八　水燥土石は、我に得て、而して氣液骨肉を爲す、
一四一六九　氣の大分は、天なり、神なり、而して
一四一七〇　意なる者は、神中の一小氣なり、故に
一四一七一　神靈感運は、我に得て、而して神靈爲技を爲す、
一四一七二　神靈は意智の心を爲す、
一四一七三　感運は情慾の性を爲す、
一四一七四　相い和して運用の爲、
一四一七五　　言動の技を爲す、
一四一七六　意智情慾。合して之を言えば、則ち意智と無く、情慾と無く、
一四一七七　自然にして我に有するは、則ち性なり、
一四一七八　運爲して　事に用するは、則ち心なり、
一四一七九　分ちて之を言えば、情慾の感應、自然に於いて發するは、則ち性なり、
一四一八〇　意智の運爲、然ら使むるに用するは、則ち心なり、然り而して

一四一八一　無意は、則ち精靈自然にして、而して感應然ら使む、
一四一八二　有意は、則ち感應自然に發して、而して知運然ら使む、
一四一八三　天人の別なり。然り而して無意無作の神は、往來分合を爲す、
一四一八四　有意有作の神は、運用言動を爲す、
一四一八五　運用なる者は、心に於て爲す、故に爲と曰う、
一四一八六　言動なる者は、外に於て發す、故に技と曰う、
一四一八七　然り而して彩聲氣性は、物に具す、
一四一八八　好惡知覺は、氣に具す、
一四一八九　大は外より保す、
一四一九〇　小は内より保す、
一四一九一　大は則ち内を質にす、
一四一九二　小は則ち外を質にす、
一四一九三　動植なる者は。小中の偶なり。
一四一九四　意を用うれば、則ち氣液骨肉を分つ、
一四一九五　意を舍つれば、則ち氣液骨肉を合す、
一四一九六　内を虚にすれば、則ち養を内より取る、
一四一九七　内を實にすれば、則ち養を外より取る、故に
一四一九八　植は彩聲臭味を呈す、

(I 528a)

(PB 195)

一四一九九　動は彩聲臭味を用す、
一四二〇〇　成れば則ち自から保し自から運す、
一四二〇一　依れば則ち或いは給し或いは資る、故に
一四二〇二　小物は。成るや則ち各自に保運す、
一四二〇三　　立つや則ち互いに相い給資す、
一四二〇四　心性の意、
一四二〇五　爲技の爲、
一四二〇六　動は以て之を分つ、
一四二〇七　植は以て之を合す、
一四二〇八　分たざれば則ち之を混有す、
一四二〇九　合せざれば則ち之を粲立す、
一四二一〇　人は則ち物中の一物なり、
一四二一一　意は則ち神中の一氣なり、
一四二一二　人は己を有して以て其の境を開く。是に於て
一四二一三　己に非ざる者を併せて。己と之と勢を張る。故に
一四二一四　其の遇する所は皆な物にして。而して往く所は皆な天なり。
一四二一五　　物なる者は。天地に得て。而して物を成する者なり。
一四二一六　物は成りて而して天地と勢を張る。是に於て。

一四二七　天と神は竝び立つ。
一四二八　人と物は相い居る。故に
一四二九　彼も能く没露す、
一四三〇　此も亦た没露す、
一四三一　露中は、則ち天地なり、我に得て、乃ち身生なり、
一四三二　没中は、則ち神本なり、我に得て、亦た神本なり、
一四三三　天に於いて資る、
一四三四　與に依りて立つ、故に
一四三五　動植は天に同居し地に立つ。
一四三六　水燥を以って、能く其の物を宅す、
一四三七　日影に従いて、能く其の氣を行る、
一四三八　氣液骨肉、
一四三九　心性爲技、
一四四〇　精より之を觀れば、彼此同く有り、
一四四一　麁より之を觀れば、彼此相い隔つ、故に
一四四二　植の跡を混有に没するも、亦た其の氣は其の中に在り、
一四四三　動の跡を粲立に露するも、亦た其の氣は彼の外に在らず、故に
一四四四　我の立するや。同じく混粲の氣體を有す。

一四二三五　神氣は體を混用し、本氣は體を粲成す、
一四二三六　生體は神を粲有し、身體は本を混成す、
一四二三七*　體は則ち軀なり、
一四二三八　軀は身生を以て立す、而して生は則ち氣液なり、身は則ち骨肉なり、
一四二三九　氣なる者、一溫一動なり、而して溫は營衛を有す、動は息脈を有す、
一四二四〇　液なる者、一血一膏なり、而して血は津血を有す、膏は脂髓を有す、
一四二四一　肉なる者、一臟一腑なり、而して臟腑は各おの内外を分つ、
一四二四二　骨なる者、一筋一骨なり、而して筋骨も亦た内外を分つ、
一四二四三　混氣は則ち神なり、神は意爲を以て成る、而して
一四二四四　意は則ち心性なり、
一四二四五　爲は則ち爲技なり、
一四二四六　地の水燥土石は、乃ち人の氣液骨肉なり、故に
一四二四七　水の氣を爲すや。氣の質に之くなり。
一四二四八　質に之きて未だ質を定めず。是に於てか。
一四二四九　水は猶お氣のごとくなり。是を以て。
一四二五〇　氣は則ち溫なり、
一四二五一　液は則ち潤なり、故に
一四二五二　其の生くるや、之を摸すれば則ち溫、之を傷ければ則ち血、

(I 528b)

(PB 197)

一四二五三　其の死するや、之を摸して溫を得ず、之を傷けて血を見ず、是に於て。
一四二五四　觀る。氣の物を爲すや、死すれば則ち之を亡す、
一四二五五　物の物を爲すや、死すと雖も之を留むるを、故に
一四二五六　動植を合して之を言えば、神氣は爲技なり、
一四二五七　動植を分ちて之を言えば、植に神氣爲技と爲す、
一四二五八　動に心性爲技と爲す、蓋し
一四二五九　神の物を爲すは。物に主として。而して物を用うる者なり。
一四二六〇　物に主として。而して體を爲さざるなり。
一四二六一　體を爲さざると雖も而も物を没中に成す。
一四二六二　爲技とは。惟だ其の發して事を爲す者なり。
一四二六三－六四　心なる者は、一意一智なり、而して意に思慮有り、
一四二六五　智に知辨有り、
一四二六六－六七　性なる者は、一情一慾なり、而して情に愛憎有り、
一四二六八　慾に欲惡有り、
一四二六九－七〇　爲なる者は、一運一爲なり、而して運に運行有り、
一四二七一　爲に立持有り、
一四二七二－七三　技なる者は、一聲一技なり、而して聲に和激有り、
一四二七四　技に守禦有り、

一四二七五　氣は、我の燥なり、
一四二七六　液は、我の水なり、
一四二七七　肉は、我の土なり、
一四二七八　骨は、我の石なり、
一四二七九　神情は、我に於ては心性を爲す、
一四二八〇　造化は、我に於ては爲技を爲す、
一四二八一　天地の我と同じき所なり。而して
一四二八二　彼なる者は、地質を内に結びて、天氣を外に轉ず、
一四二八三　我なる者は、骨肉を外に護して、溫動を内に保す、是れ
一四二八四　天地の我と反する所なり。然り而して
一四二八五　氣に溫動有り、
一四二八六　液に膏血有り、
一四二八七　肉に臟腑有り、
一四二八八　骨に筋骨有り、
一四二八九　心に意智有り、
一四二九〇　性に情慾有り、
一四二九一　爲に運爲有り、
一四二九二　技に言動有り、而して

（神を性に訂正傍記。）

愛憎欲惡なる者は、好惡なり、
思慮知辨なる者は、知覺なり、
物に好惡知覺を有せざる者無し。蓋し
人の大分は。意と身となり。而して
身は生と偶す、
意は爲と對す、
身生なる者は、動の天地なり、
意爲なる者は、動の性才なり、蓋し
天地の條理は。質は必ず冷止す、
氣は必ず溫動す、而して
植質は冷にして、
動質の溫なる者は、何ぞ。
質に動止の異有ればなり。
性情爲技なる者は。動植の共に有する所なり。
惟だ意に於て相い有無するのみ。
植は地に就きて竪立す、地の類なり、故に意の神を冷止に於て舍つ、
動は天に在りて横行す、天の類なり、故に意の神を溫動に於て寓す、
溫動なる者は、生なり、氣血は之に繫ぐ、

(I 529a)

形體なる者は、身なり　骨肉は之を成す、
質體なる者は、冷止の物なり。
神を有して此の中に動く。是れ
其の體の溫なる所なり。蓋し
天地なる者は。偏寒偏熱を以てして成る者なり。然り而して
動なる者は。溫動の氣を以て。冷止の質に和す。
和合は以て活す、
乖離は以て化す、
化すれば則ち溫去り冷生ず　以て質の自然なるを觀、
活すれば則ち冷去り溫釀す　以て氣の使然なるを知る、
氣は溫にして動す、
血は溫にして活す、故に
血の體に充つるは。存すれば則ち滾滾として充つ、
　死すれば則ち倏忽として失す、
是れに由りて之を觀るに。
血なる者は。活動の氣化なるや。明けし。故に
血なる者は。氣の化なり。
氣を得て骨肉の實質と對す。是に於てか。

一四三二九　骨肉氣血は親を爲す。以て能く好惡知覺す。此の故に
一四三三〇　感應の運爲する所は。性に於て有る者は、
一四三三一　　神に於て之れ有り、是の故に。
一四三三二　意の有無は動植に於て分ると雖も。而も
一四三三三　動中も亦た此の有無を平分す。故に
一四三三四　生の好惡知覺は、無意に於てす、
一四三三五　心の好惡知覺は、有意に於てす、
一四三三六　同じく是れ神爲なり。同じく是れ神爲なりと雖も。而も其の爲は則ち反す。
一四三三七　反に由りて同を觀す、
一四三三八　同に由りて反を觀す、其の態は識る可し。
一四三三九　粗ぼ其の槩を擧げて以て之を言わんに。
一四三四〇　勞逸を知り、睡覺を知り、痛苦を知るは、皆な無意の神爲なり、
一四三四一　適否を知り、蔽悟を知り、憂樂を知るは、皆な有意の神爲なり、是を以て。
一四三四二　好惡知覺。有意無意。相い應ず。是を以て。
一四三四三　生に痛有れば、則ち心も亦た悼有り、
一四三四四　生に痒有れば、則ち心も亦た痒有り、
一四三四五　痛は呻吟を爲す、
一四三四六　悼は哭泣を爲す、

(PB 199)

(I 529b)

一四三四七　身　痒ければ則ち爪掻く、
一四三四八　心　痒ければ則ち歯切る、
一四三四九　身　麻すれば則ち左右の運動する所無し、
一四三五〇　心　癡なれば則ち進退の運爲する所無し、
一四三五一　人の会肌を摸せば、則ち肌は羞らいて口は笑う、
一四三五二　人の会事を訐けば、則ち身は羞らいて心は笑う
一四三五三　人の肌肉を割けば、則ち肉傷んで氣痛む
一四三五四　人の親戚を割けば、則ち情傷んで心痛む
一四三五五　氣は鬱して病み、達して快す、
一四三五六　心は鬱して悶え、達して安ず
一四三五七　氣を病めば則ち身を癈す、
一四三五八　知を病めば則ち徳を壊す、
一四三五九　是れ乃ち天人の應なり。然り而して
一四三六〇　情慾は、有意の感應なり、
一四三六一　意智は、有意の知運なり、
一四三六二　體は耳目鼻舌、手足会乳の文を有す、而して其の爲は萬變す、
一四三六三　心は意智情慾、運用營施の事を有す、而して其の運は錯綜す、
一四三六四　爲は虚實守禦を爲す、而して愛憎欲惡は、其の間に成る、

一四三六五　意は思慮知辨を運す、而して善惡是非は、其の中に出づ、

一四三六六　粲體は則ち文なり、體は臟腑を以て成る、而して

一四三六七　臟は則ち内臟外臟、腑は則ち内腑外腑なり、

一四三六八　内臟は上下を分ちて、上は則ち心肺、下は則ち肝腎なり、

一四三六九　外臟は上下を分ちて、上は則ち耳目、下は則ち鼻舌なり、

一四三七〇　内腑は上下を分ちて、上は則ち咽胃、下は則ち腸脬なり、

一四三七一　外腑は上下を分ちて、上は則ち会乳、下は則ち手足なり、

一四三七二　獸は必ず身を俯す。身を俯すれば則ち横たわる。

一四三七三　横たわれば則ち手足は下に在りて。会乳は上に在り。

一四三七四　人は身を竪にするを以て。其の體を異にするのみ。

一四三七五　粲氣は、則ち體の文に從うの氣なり、

一四三七六ー七七　其の氣は本神を以て成る、而して神は則ち内神外神なり、

一四三七八　本は則ち内本外本なり、

一四三七九　内神は精麁を用う、而して精は以て保運す、麁は以て化持す、

一四三八〇　外神は精麁を用う、而して精は以て視聽す、麁は以て聞味す、

一四三八一　内本は精麁を用う、而して精は以て納畜す、麁は以て收送す、

一四三八二　外本は精麁を用う、而して精は以て交字す、麁は以て舞踏す、

一四三八三　混氣物なる者は、體なり、諸を大物に資り、以て己の有と爲す、

一四三八四　粲氣物なる者は、文なり、諸を身生に得て、以て己の神を用う、
一四三八五　植も亦た多種なり、
一四三八六　動も亦た多種なり、
一四三八七　資給は同じからずして、
一四三八八　通塞は各おの異なるなり、然りと雖も。
一四三八九　動中。意智の巧を極め、
一四三九〇　　造化の機を弄する者は、人。之を最と爲す。故に
一四三九一　我が境よりして。而して有意を推す、
一四三九二　　無意を察す、
一四三九三　混資は己を成す、
一四三九四　粲立は佗を用う、
一四三九五　混體は、則ち本根の身生なり、内外臟腑の文を粲立す、
一四三九六　混氣は、則ち精英の神爲なり、内外本神の文を粲立す、
一四三九七　　天地天神なる者は、我を成するの氣なり、
一四三九八　彩聲臭味なる者は、我が交る所の氣なり、而して
一四三九九　氣は豈に啻に此の四のみならんや、
一四四〇〇　寒熱溼燥は、膚に覺る、
一四四〇一　善惡是非は、心に覺る、

一四〇二　輕重は捧うるに覺る、
一四〇三　強弱は持するに覺る、
一四〇四　堅輭は摸するに覺る、
一四〇五　毒藥は養するに覺る、
一四〇六　配嗣器地なる者は、我を立するの質なり、
一四〇七　水穀便溺なる者は、我を寄するの質なり、而して
一四〇八　質は豈に此の四のみならんや、
一四〇九　絺綌裘帛は、寒暑に切なり、
一四一〇　門牆干戈は、守禦に切なり、
一四一一　藥餌は、疾病に切なり、
一四一二　枕席は、臥寐に切なり、惟だ
一四一三　彼の氣質の各おの八なる者は、動の至切なる者なるのみ。此の故に。
一四一四　魚に耳無し。鳥に脘無し。
一四一五　艸木は配偶に假らず。
一四一六　魚介は手足に假らず。
一四一七　瞽者は色に假らず。
一四一八　聾者は聲に假らず。
一四一九　精英は能く本根に發す、

本根は能く精英を收む　故に
天は以て己を成す、
神は以て己を用す　故に
本根なる所の者は　胚胎に兆し　黄壤を貫く、
精英なる所の者は　後れて榮し先んじて謝す　晝は神に夜は昏し　故に
正ければ則ち治る、
病めば　則ち亂る　是を以て
神の軀に居る　之れを生と爲す、
軀の神を喪う　之れを死と爲す、
氣は無體を以て動く、
質は有質を以て止る、
氣聚まれば則ち體結ぶ、
體解くれば則ち氣散ず、
暴露する者は、體は必ず早壞す　佗無し　氣の散じ易きを以てなり、
蟄藏する者は、體は必ず久持す　佗無し　氣の洩れざるを以てなり、
心なる者は　氣の華なり、
身なる者は　氣の根なり、
氣なる者は　動き易く佚し難し　故に心は宜しく恬澹を以て養うべし、

一四三八　體なる者は、靜を好み勞を惡む　故に身は宜しく動を以て作養すべし、
一四三九　神は軀を役す、之れを覺と爲す、
一四四〇　軀は神を役す、之れを夢と爲す、
一四四一　視聽なる者は、耳目の氣なり、
一四四二　舞踏なる者は、手足の氣なり、而して
一四四三　好惡思辨なる者は。神氣なり。
一四四四　氣は本根を爲す、
一四四五　心は英華を爲す、
一四四六　心は固に一身の主なり。
一四四七　四肢百骸。皆な其の役を爲す。是の故に。
一四四八　心は能く使令す、
一四四九　氣は能く命を聽けば、則ち
一四五〇　耳目は視聽す、
一四五一　手足は舞踏す、
一四五二　心は令すと雖も。而も氣　聽かざれば。則ち聾盲癱瘓。癲狂妄動す。
一四五三　心は尊しと雖も、而も親自すること能わず、
一四五四　氣は卑しと雖も、而も用を作すこと己に由る、
一四五五　老壯病健は。惟だ氣の從なり。是を以て。

一四五六
一四五七
一四五八
一四五九
一四六〇
一四六一
一四六二
一四六三
一四六四
一四六五
一四六六
一四六七
一四六八
一四六九
一四七〇
一四七一
一四七二
一四七三

心　氣を役すれば、則ち視聽云爲、自から正し、覺の事なり、
氣　心を役すれば、則ち神は耳目を視聽に於て役せず、
反って視聽する所の氣に於て役せらる、
　心は手腳を舞踏に於て役せず、
反って舞踏する所の氣に於て役せらる、夢の事なり、故に
正有り。邪有り。感有り。背有り。前事を記する有り。
將來を知る有り。思う所に由る有り。思わざる所を得る有り。
愛す可く。惡む可く。驚く可く。樂しむ可く。其の狀は千萬と雖も。
惟だ心の氣に於て役せらるるに由るのみ。
本根は困しめば則ち精華は病む、
精華は病めば則ち本根は苦しむ、
憂悲思慮なる者は、心の病なり、
痛痒饑渴なる者は、氣の病なり、
心　勞せば則ち氣困しむ、
氣　病めば則ち心苦しむ、是を以て。
魑魅は神を毒す、
疾病は心を亂す、則ち
恍惚は夢覺を分たず。

徒らに視て徒らに聽き。徒らに舞いて徒らに踏むのみ。
神明　主と爲し。號令　嚴肅なれば。則ち
肢體は各おの命を待ちて。而して皆な用を一心に統ぶるなり。
生の身に充つる、之れを壯と爲す、
身の生を散ずる、之れを老と爲す、
生の神に旺する、之れを寐と爲す、
神の生に旺する、之れを寤と爲す、
氣は。來れば則ち充つ、
　往けば則ち散ず　而して
寤寐なる者は、神本の更るがわる政を爲すなり、
夢覺なる者は、神本の更るがわる役を爲すなり、
故に神は其の權を執れば則ち正し、
　其の權を失えば則ち狂す、
生の本根を爲すは、猶お國の衆を以て基と爲るがごときなり、
心の英華を爲すは、猶お國の君を以て主と爲るがごときなり、夫れ
朝廷なる者は　禮樂文物の在る所、
聰明才徳の居る所、號令控製の由る所なり、
郊野なる者は、禮樂文物に於て足らず、

(I 531a)

(PB 204)

一四四七四
一四四七五
一四四七六
一四四七七
一四四七八
一四四七九
一四四八〇
一四四八一
一四四八二
一四四八三
一四四八四
一四四八五
一四四八六
一四四八七
一四四八八
一四四八九
一四四九〇
一四四九一

聡明才徳に於て乏し　亦た號令控掣の權を有せず、
前後左右、仰ぎて之を上に於て待つ者なり　故に
上は控掣の權を執りて　以て下を馭し、
下は號令の命を奉じて　以て上に聽けば　則ち能く太平を致す
上は聡明の徳を失して　而して下を監すること能わず、
下は控掣の權を竊んで　以て上を犯せば　則ち終に擾亂を致す　故に
氣なる者は　心の基なり、
心なる者は　氣の主なり、
心は號令控掣し　以て能く氣を役使す、
氣は動靜云爲し　皆な命を待ちて爲す　是の故に。
氣は苟くも痛痒恐懼する有れば、則ち懊惱戰慄し　心の制を受けず、
心は苟くも感激憤發する有れば、則ち重傷大疵し　自覺せざるなり、
是れ主客の事なり。夫れ
視聽舞踏なる者は　氣の爲す所なり、
耳目の視聽を役し　手腳の舞踏を役する者は、心の爲す所なり、
心令し氣聽けば、則ち　視て　其の色を辨じ、
　聽きて其の聲を辨じ、
舞いて其の節に中り、

踏みて其の地を得るは、人の正なり、

心は之を令するを知らざれば、
氣は徒らに其の用を爲して、
視て　其の色を辨ぜず、
聽きて其の聲を辨ぜず、
云いて其の言を擇ばず、
爲して其の事を擇ばず、
是れ之を狂と爲す、
上下は序を有し、治安は謀る可し、
位序は未だ分れずんば、烏んぞ治を謂うを得ん、
下　苟くも上に於て聽かずんば、則ち衆は各おの其の用を爲す、
國に於ては、則ち亂を爲し亡を爲す、
人に於ては、則ち癲を爲し狂を爲す、
主　權柄を專らにすれば、則ち衆　役使に於て困しむ、
國に於ては、則ち弊を爲し危を爲す、
人に於ては、則ち病を爲し死を爲す、
其の精を守れば則ち眞なり、
其の主を喪えば則ち妄なり、

(I 531b)

神なる者は。心の精爽なり。是を以て。
目を病めば、則ち大虚に蚊虻を見る、
耳を病めば、則ち漠中に蟬雀を聞く、夫れ
病邪は元と内に在り。而して聲色は妄を外に於て爲す。
心は精爽を失せざれば、則ち聲色の眞妄を辨ず、
心は精爽を失すれば、則ち必ず蚊虻を撲し、蟬雀を驅る、
病まざる者は、妄狀を視聽に於て認めず、
病む者は、則ち妄狀を視聽に於て認む、故に
神正しくして、而して衆と同じく視聽す、是れ其の眞なり、
神病んで、而して佗と視聽を別にす、是れ其の妄なり、
物は已に象形を具す。孰れか目に於て逃れん。何となれば則ち
面前の色、目に於て印し、目の神、接して物を鑑す、
左右の聲、耳に於て感じ、耳の神、受けて聲を辨ず、
色は目に印せず、
聲は耳に感ぜず、而して色と聲とを成す者は。
豈に外に在る者ならんや。故に
心は邪の爲に役せられ。其の視聽擧動をして。
物に對するが如くならしむる者は。實に妄狀のみ。

一四五四六　何ぞ眼華。耳鳴。睡語。夢影と異ならん。
一四五四七　故に生は其の可に適すれば則ち和す、其の否に遇えば則ち勞す、
一四五四八　天地なる者は、一寒一熱なり、而して
一四五四九　我が身は、則ち寒熱に和して溫、戻れば則ち偏寒偏熱を生ず、
一四五五〇　天地なる者は、一燥一溼なり、而して
一四五五一　我が身は、則ち燥溼を合して中、偏れば則ち偏燥偏溼を成す、
一四五五二　此の故に寒暑を衝く、
一四五五三　雨雪を冒す、
一四五五四　饑飽に過ぐ、
一四五五五　嗜好に淫す、
一四五五六　力の及ばざる所に役す、
一四五五七　智の能わざる所に勞す、
一四五五八　彼の勞苦の事。皆な職として此れ之に由る。
一四五五九　其の養を得れば則ち健なり、
一四五六〇　其の毒に遇えば則ち病なり、
一四五六一　食色器貨。淫すれば則ち人を毒す。
一四五六二　寒熱風溼。忤らえば則ち人を毒す。
一四五六三　水火金石。触るれば則ち人を毒す。

一四五六四　諂佞便戻。親しめば則ち人を毒す。
一四五六五　故に意は爲を具すれば則ち性なり、
一四五六六　　爲の意を能するは則ち才なり、
一四五六七　思なる者は、意の物に於て運するなり、
一四五六八　業なる者は、物の意に於て運するなり、是に於て。
一四五六九　交接の問。意は順忤を有す、
一四五七〇　　態は治亂を爲す、是の故に。
一四五七一　人は天地の給する所に資る、
一四五七二　　萬物の立する所に依る　故に
一四五七三　大物は神を給す、我は資りて意と爲す、
一四五七四　大物は爲を給す、我は資りて爲と爲す、
一四五七五　意は則ち心性なり。
一四五七六　性なる者は、神の給する所なり、
一四五七七　心なる者は、靈の給する所なり、故に
一四五七八　情慾なる者は、神の物と交接する所、感應の態なり、
一四五七九　意智なる者は、靈の物と交接する所、運營の態なり、
一四五八〇　爲なる者は、神爲の自ら用うる所なり、
一四五八一　技なる者は、靈爲の佗を用うる所なり、故に

(I 532a)
(PB 206)

一四五八二　運爲なる者は、氣體を運行立持するなり、
一四五八三　聲技なる者は、氣體を和激守禦するなり、夫れ
一四五八四　物は天地の間に竝立して。而して
一四五八五　彼此は交接を爲す。是の故に。
一四五八六　情は外に感ず、而して愛憎は動く、
一四五八七　慾は内に應ず、而して欲惡を出す、
一四五八八　情なる者は、心の氣に感ずるなり、
一四五八九　慾なる者は、氣の心に感ずるなり、是を以て。
一四五九〇　心なる者は内に在りて、而して用を外に於て爲す、物は牽けば則ち愛憎に外に於て從う、
一四五九一　體なる者は外に在りて、而して事を内に於て用す、身は動き而して色食を内に於て求む、
一四五九二　我の愛憎は、佗の美醜吉凶よりす、
一四五九三　酸鼻の隱、甘心の忍、
一四五九四　毎に之を内に於て快にして、而して之を外に於て伸ばさんを思う、
一四五九五　他の聲色服飾は、我の耳目口體の爲にして求む、
一四五九六　輿馬粉黛の美、絲竹羞饌の具、
一四五九七　常に之を前に於て備えて、而して之を内に於て恣まにせんと欲す、
一四五九八　内に求むれば則ち外は之に從う、
一四五九九　外に從がえば則ち内は之を求む、

(PB 207)

一四六〇〇　意は運して思慮は神なり、
一四六〇一　智は營して知辨は靈なり、
一四六〇二　愛憎の施する所、親疏を致す、
一四六〇三　欲惡の接する所、悦怨を動かす、
一四六〇四　人の美を愛すれば則ち羨む、
一四六〇五　己の美を愛すれば則ち矜る、
一四六〇六　己の惡を惡めば則ち羞づ、
一四六〇七　人の美を惡めば則ち妬む、
一四六〇八　思に順忤有りて、而して喜怒　應ず、
一四六〇九　慮は肅舒有りて、而して憂欽　成る、
一四六一〇　智は吉凶を解く、而して哀樂　感ず、
一四六一一　辨は得失を分つ、而して悔咎　生ず、且つ
一四六一二　情は。注ぎて慕う、
一四六一三　背きて斁う、
一四六一四　合を欲して求む、
一四六一五　分を惡みて惜む、
一四六一六　意は、鬱して　慍なり、暢して驕なり、
一四六一七　智は、素にして慤なり、飾って詐なり、

一四六一八　思の存亡する所、記忘有り
一四六一九　智の動止する所、信疑有り、
一四六二〇　辨を事物に於て用うれば、則ち美醜を分つ、
一四六二一　道を進退に於て考うれば、則ち榮辱を成す、此の故に。
一四六二二　神は。劫かす所有れば則ち驚く、
一四六二三　危ぶむ所有れば則ち畏る、
一四六二四　痛む　所有れば則ち泣く、
一四六二五　弄する所有れば則ち笑う、
一四六二六　病む　所有れば則ち苦む、
一四六二七　役する所有れば則ち勞す、
一四六二八　運は以て氣體を運行す、
一四六二九　爲は以て氣體を立持す、
一四六三〇　音聲を發して、而して虛實を見す、
一四六三一　爲の精を用うる、一は則ち聲を發す、
一四六三二　一は則ち技を發す、
一四六三三　技に發する者は、守禦に爲す、
一四六三四　聲に發する者は、和激に在り、
一四六三五　守禦の技は、或いは歯角に於てす、

或いは距跔に於てす、
或いは首尾に於てす　而して人は則ち專ら手足に於てす、
和激の發は、笑泣喜怒を各おの發す、
或いは音聲を羽脘に於て發する者有り、
或いは聲音を假らざる者有り、
人なる者は。意爲に長ずる者なり。故に
聲音を弄して、而して言語の文を爲す、
手足を役して、而して千百の事業を爲す、故に
人は。意を適否に於て運す　而して善惡歧す、
智を當否に於て用す、而して是非作る、
情を口舌に於て吐して、而して虛實成る、
慾を手足に於て施して、而して守禦起る、是を以て。
物の已に分るる。己に切にして佗に疏す。
切なる者を守らんと欲す。故に害する者を禦ぐ。故に
學と曰う、
禮と曰う、
仁と曰う、
義と曰う、

一四六三六
一四六三七
一四六三八
一四六三九
一四六四〇
一四六四一
一四六四二
一四六四三
一四六四四
一四六四五
一四六四六
一四六四七
一四六四八
一四六四九
一四六五〇
一四六五一
一四六五二
一四六五三

一四六五四　業と曰う、
一四六五五　務と曰う、
一四六五六　藥餌と曰う、
一四六五七ー五八　飲食と曰う、而して千萬なる者は、皆な守の事なり、
一四六五九　衣服と曰う、
一四六六〇　牆屋と曰う、
一四六六一　軍旅と曰う、
一四六六二　城郭と曰う、
一四六六三　戒と曰う、
一四六六四　禁と曰う、
一四六六五　禱と曰う、
一四六六六ー六七　刑と曰う、而して千萬なる者は、皆な禦の事なり、
一四六六八　守禦を務むるの間。物を弄するの工は。
一四六六九　一正一誕。
一四六七〇　一護一訐。虚實の間なり。
一四六七一ー七二　正なる者は、直なり、質なり、護する者は、以て褒し、以て覆う、而して千萬なり、（I 533a）
一四六七三ー七四　誕なる者は、詐なり、誣なり、訐なる者は、以て犯し、以て害す、而して千萬なり、故に
一四六七五　寓する者は、言に虚すと雖も、而も意に實す、

訐なる者は、事に實すと雖も、而も意に虚す、
或いは言に正うして、而して意に曲なり、
或いは言に迂にして、而して事に敏なり、故に
情を以て之を言えば、一虚一實なり、
事を以て之を言えば、虚實は共に可否なり、
動作を發して、而して守禦を爲す、
人と物と。同じく口舌手脚を具す、
同じく聲音營施を具す、
物の聲音營施は、自使混然たり、
人の聲音營施は、自使粲焉たり、
自使混然とは、何ぞや、
鳴けば則ち其の聲は自から發す、
動けば則ち其の技は自から露す、
自使粲焉とは、何ぞや、
泣笑は自から憂樂に於て發す、而して歌哭は轉折を以て分る、
舞踏は自から動作に於て成す、而して技巧は意匠に由て變ず、
有意の能。意匠を轉折して。神靈の妙を囀し。鼓舞の巧を弄す。是れ乃ち
人の獨り有する所にして。而して別に吼囀飛走の外に發す。

一四六七六
一四六七七
一四六七八
一四六七九
一四六八〇
一四六八一
一四六八二
一四六八三
一四六八四
一四六八五
一四六八六
一四六八七
一四六八八
一四六八九
一四六九〇
一四六九一
一四六九二
一四六九三

一四六九四　聲音は轉折して、而して事物は狀を無形に於て成す、之を言語と謂う
一四六九五　之を咨嗟咏嘆して、而して歌曲を作る、之を序して律呂を爲す、
一四六九六　技巧は經營して、而して事物は體を有形に於て成す、之を事業と謂う、
一四六九七　之を文章修飾して、而して禮樂を爲す、
一四六九八　之を虛にして跡を爲す、
一四六九九　之を實にして器を爲す、
一四七〇〇　聲を認めて書を爲す、
一四七〇一　型を摸して畫を爲す、
一四七〇二　言語なる者は、意智情慾を聲音に於て轉ずる者なり、
一四七〇三　事業なる者は、意智情慾を技巧に於て舞する者なり、
一四七〇四　言語の道は、心に生して、而して聲に發す
一四七〇五　　耳に受けて、而して心に辨す、
一四七〇六　心に生して、而して聲に發する者は、虛も亦た狀を成す、
一四七〇七　　實も亦た狀を成す、
一四七〇八　或いは素を以て之を直にす、
一四七〇九　或いは文を以て之を飾る、
一四七一〇　或いは野を以て之を出だす、
一四七一一　或いは誕を以て之を欺く、

一四七一二　耳に受けて、而して心に辨ずる者は、
一四七一三　或いは以て之を信ず、
一四七一四　或いは以て之を疑う
一四七一五　信疑の間に虚實して、而して言に成る者は、千萬なり、
一四七一六　動作の事は、心に發して、而して身に動く、
一四七一七　我に出でて、而して彼に見る
一四七一八　心に發して、而して身に動く者は、以て能く守り、以て能く禦す、
一四七一九　守や、以て身を修め、以て産を治す、
一四七二〇　禦や、以て微を慎み、以て備を修む、
一四七二一　我に出でて、而して彼に見るる者は、
一四七二二　或いは以て往く、
一四七二三　或いは以て來る、
一四七二四　往來の中に守禦して、行に成る者は、千萬なり、此の故に。
一四七二五　好を出だし戎を興す、
一四七二六　禍を締び福を致す、
一四七二七　心性に機す、而して
一四七二八　言行に定む、
一四七二九　是に於て。文、以て其の用を具する。猶お人の府庫を設けて。

(I 533b)

(PB 210)

一四七三〇　銭帛を置き。門戸を開きて。出入りを爲すがごとし。故に
一四七三一　肺は天氣を保し、肝は地氣を化し、心は其の神を運し、腎は其の天を持す、
一四七三二　咽は水穀を納め、胃は水穀を畜え、脬は其の浄を泌別し、腸は其の穢を送輸す、
一四七三三　耳目鼻舌は、彩聲臭味を通ず、
一四七三四　会乳手足は、配嗣器地を用す、
一四七三五　粲氣は、則ち物に接するの氣なり、
一四七三六　粲體は、則ち意を用うるの器なり、是を以て。
一四七三七　神本の氣は、上下の體に居る、
一四七三八　精麁の氣は、内外の體を雑う、是に於て。
一四七三九　肺肝心腎、耳目鼻舌、保運化持、視聴聞味す、
一四七四〇　咽胃腸脬、手足会乳、納畜收送、舞踏交字す、
一四七四一　上體を臓と爲す、
一四七四二　下體を腑と爲す、而して臓腑は各おの内外を有す。
一四七四三　内臓、中は則ち心なり、端は則ち腎肺肝なり、
一四七四四　外臓、中は則ち舌なり、端は則ち鼻耳目なり、
一四七四五　内腑、中は則ち胃なり、端は則ち咽腸脬なり、
一四七四六　外腑、中は則ち会なり、端は則ち手足なり、
一四七四七　神氣は、神なり、

本氣は、天なり、而して
神本は各おの内外を有す。
内神は、精以て神本の氣を運持す、
麁以て天地の氣を保化す、
外神は、精以て聲色を視聽す、
麁以て臭味を聞味す、
内本は、精以て水穀を納畜す、
麁以て便溺を收送す、
外本は、精以て配嗣に交字す、
麁以て器地に舞踏す、
混然たる體用は、以て物を合す、
粲然たる氣物は、以て神を開く、
鳥獸鱗甲。大抵は相い類す。惟だ
人は。則を天地に於て觀て、以て道を立つ、
爲を設施に於て開きて、以て禮を制す、
修は以て亂を防ぐ、
荒は以て治を擾す、是れ
物の無き所にして。而して人事の關鍵なり。夫れ

(PB 211)

(I 534a)

一四七四八
一四七四九
一四七五〇
一四七五一
一四七五二
一四七五三
一四七五四
一四七五五
一四七五六
一四七五七
一四七五八
一四七五九
一四七六〇
一四七六一
一四七六二
一四七六三
一四七六四
一四七六五

一四七六六　水陸なる者は。持中の兩天地なり。
一四七六七　堅輭の動植は。擾擾として其の間に竝び立つ。
一四七六八　神爲變化。有無通塞。具に有る所を盡くすなり。蓋し
一四七六九　物の將に生ぜんとするや、其の氣は混混沌沌たり、惟だ
一四七七〇　神は涬涬として、天地を其の中に於て存す、
一四七七一　其の既に化するや、　其の物は汪汪洋洋たり、惟だ
一四七七二　氣は衰衰として、其の物を天地に於て一にす、
一四七七三　生は。本生を有す、
一四七七四　　餘生を有す、
一四七七五　餘生は或は氣を以てして化す、
一四七七六　本生は必ず形を以てして傳う、
一四七七七　　水陸の艸木鳥獸は　之を本生と謂う、
一四七七八　　水陸の蟲豸菌苔は、之を餘生と謂う、
一四七七九　本生は、條理の正を守る、
一四七八〇　餘生は、條理の變を盡す、
一四七八一　本生は、正中に變を盡す、
一四七八二ー八三　餘生は、變中に正を含む、　是を以て。鳥獸は正形にして、而して鱗甲は其の變を盡す、
一四七八四　笣樹は正形にして、而して卉蔓は其の變を盡す、

(PB 212)

一四七八五　是を以て。人は則ち竪立す、
一四七八六　　獣は則ち横行す
一四七八七　我は則ち神靈を具す、
一四七八八　物は則ち聡慧に乏し、
一四七八九　獣は則ち肉脣なり、
一四七九〇　鳥は則ち骨觜なり、
一四七九一　獣は食し鳥は啄す。鼬は喰い魚は呑む。
一四七九二　獣は則ち食息す、
一四七九三　魚は則ち呑吐す、
一四七九四　鱗は、腹を以て頭の處に安んず、
一四七九五　蛇は、腹を以て手足の用を爲す、
一四七九六　象は、鼻を以て指と爲す、
一四七九七　猿は、足を以て手と爲す、
一四七九八*　馬は鼻を以て牛の舌に代う、
一四七九九*　牛は舌を以て馬の鼻に代う、
一四八〇〇　鳥は、寢るに方りて人の坐るが如し、
一四八〇一　人は、伏すに方りて魚の行くに似る、
一四八〇二　鳥は則ち尿無し、

一四八〇三　蟬は則ち屎無し、
一四八〇四　牛馬は力に勝る、
一四八〇五　貓犬は捷に勝る、
一四八〇六　鳥は手を以て翼と爲す、
一四八〇七　魚は鬣を以て肢に代う、
一四八〇八　諸生は　口扈の處を異にす、
一四八〇九　鱒は則ち口扈の處を一にす、
一四八一〇　人は　清潔を好む、
一四八一一　烏鳶は則ち臭穢を喜ぶ、
一四八一二　蝙蝠は　倒懸す、
一四八一三　螺は則ち倒行す、
一四八一四　鰕は後に向いて跳ぬ、
一四八一五　蟹は旁に向いて行く、
一四八一六　諸動は、則ち内骨外肉なり、
一四八一七　甲介は、則ち外骨内肉なり、
一四八一八　鳥の羽翼は。則ち魚の鱗鬣なり。
一四八一九　牛馬の脣舌は。則ち獣の手指なり。
一四八二〇　鷗鷺は能く水に著く、

一四八二一　人は則ち好んで火を執る、
一四八二二　望潮は頭を没す、
一四八二三　水母は骨無し、
一四八二四　水魚は瞑せず、
一四八二五　土蟲は息せず、
一四八二六　蟻は髭を以て視る、
一四八二七　魚は目を以て聽く、
一四八二八　蟷螂は竪口なり、
一四八二九　蚊虻は長舌なり、
一四八三〇　蜂は則ち滿面皆な目なり、
一四八三一　蛛は則ち滿身皆な腹なり、
一四八三二　鸚鵡と河豚とは、瞼獸の如し、
一四八三三　鮸魚と蟾蜍とは、體獸に似る、
一四八三四　鼯鼠は則ち獸にして翅なり、
一四八三五　鯪鯉は則ち鱗にして毛なり、
一四八三六　龜は獸の如くして卵生す、
一四八三七　鰌は鱗の類にして胎生す、
一四八三八*　蠶類は、則ち卵にして蠶、蠶にして蛹、蛹にして蛾なり、

一四八三九　蟾蜍は、則ち胞にして蝌蚪、蝌蚪にして手腳を生ず、
一四八四〇　禽獸は、則ち專ら聲音を口に於て用う、
一四八四一ー四二　羽蟲は、則ち專ら聲音を羽に於て用う　然り而して魚鼈は則ち聲音を用いること少なり。(PB 213)
一四八四三　人の技に於る、學んで後に成る、
一四八四四　物の技に於る、習わずして得る、
一四八四五　牡蠣石蚶は、含靈にして生を艸木に類す、
一四八四六　石螺石蛤は、動形にして體を土石に類す、
一四八四七　苔蘇は枝葉を假らず、
一四八四八　菌寓は全く艸木に異なれり、
一四八四九　形の傳うる所。牝牡は感應し。胎を其の中に託す。
一四八五〇　軀殼は開析し。其の物。始めて成る。
一四八五一　植の子や、或いは肉を殼にし、或いは皮を殼にす、
一四八五二　動の子や、或いは卵を殼にし、或いは胞を殼にす、
一四八五三　殼を繫くるの處は。植に之を蒂と謂う、
一四八五四　動に之を臍と謂う、
一四八五五　鱗比相い繼ぐの痕は。或いは亡し或いは存す。
一四八五六　葉布き花發し、種殼を其の中に於て繫ぐ、
一四八五七　牡感じ牝應じ、子胞を其の中に於て託す、故に

一四八五八　男女の情なる者は、發生の感にして、而して
一四八五九　子母の愛なる者は、保生の應なり、
一四八六〇　物の生は、之を天に於て資る、
一四八六一　物の養は、之を物に於て取る、故に
一四八六二　日は影を以てして養う、
一四八六三　燥は水を以てして養う、
一四八六四　己は天を以てして生ず、
一四八六五　己は天を以てして死す、
一四八六六　其の已に生じ未だ死せざる。能く持して此の體を存す。
一四八六七　持存の間、生事を有す、是れ之を養と曰う、
一四八六八　　養事に反す、是れ之を害と曰う、
一四八六九　天は之を養うに氣を以てす、
一四八七〇　地は之を養うに質を以てす、
一四八七一　天は之を害するに氣を以てす、
一四八七二　地は之を害するに物を以てす、
一四八七三　艸木は寒暑を得て、而して天に養わる、
一四八七四　　水土を得て、而して地に養わる、
一四八七五　鳥獸は噓喩を得て、而して天に養わる、

飲食を得て、而して地に養わる、
氛祲瘴癘は、能く動植を氣に於て害す、
水火金石は、能く動植を質に於て害す、
故に動植は生を天に於て得る、
養を物に於て取る、
内實する者は、外より養う、
内虚する者は、内より養う、
同じく諸を氣質に取りて成る。
植は、無意にして止りて、天地の養を没爲に於て待つ、
動は、有意にして動きて、天地の養を有爲に於て作る、蓋し
内實する者は、養を外に於て取る、
内虚する者は、養を内に於て取る、故に
彼の生を奪いて、
我が生に給す、是に於て
殺活の道有り。是の故に。
物の天は、動を殺して我の生を保する者有り、
植を殺して我の生を保する者有り、故に
保生の道は。彼を殺して我を保するに非ざる者莫し。惟だ

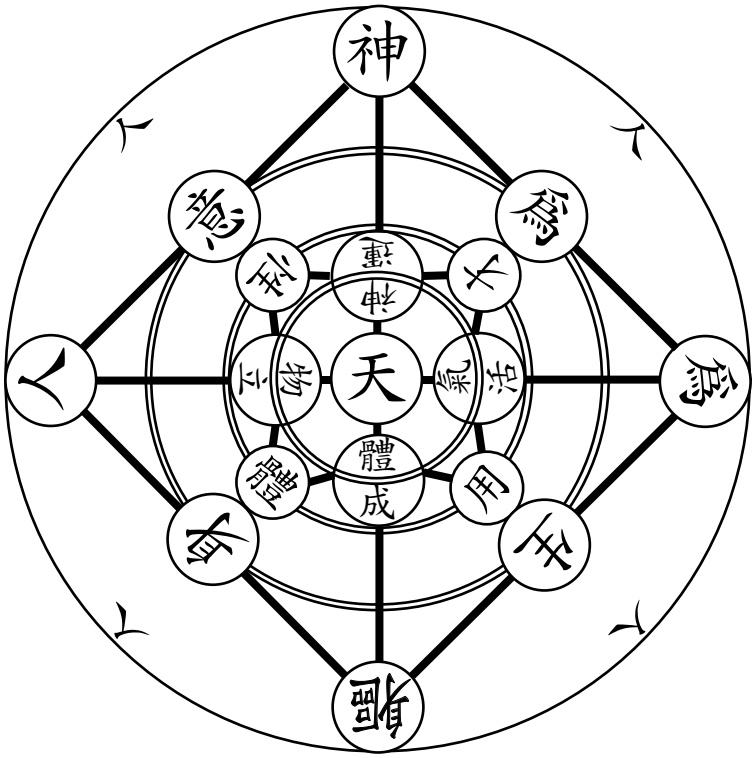
一四八七六
一四八七七
一四八七八
一四八七九
一四八八〇
一四八八一
一四八八二
一四八八三
一四八八四
一四八八五
一四八八六
一四八八七
一四八八八
一四八八九
一四八九〇
一四八九一
一四八九二
一四八九三

植なる者は無意なり、故に慘怛の憾無し、
動なる者は有意なり、慘怛の意多し、惟だ
豺虎鷹鶻より、蟷螂蜻蛉の屬に至りて、動を殺して以て生を保す、
馬牛羊豕より、蝶蛾の類に至りて、植を殺して以て生を保す、
人は。則ち動植を得て。之を水火に於て調し。能く其の生を保す。然りと雖も。
其の禀性は。慘怛を愍んで。而して殺の醜事を忌む。
故に本氣は内に保運す、
神氣は外に爲技す、故に
混然たる氣體、動植は同く之を有す、
粲然たる氣體、植は動の用を舍つ、

(PB 215)
(PB 216)

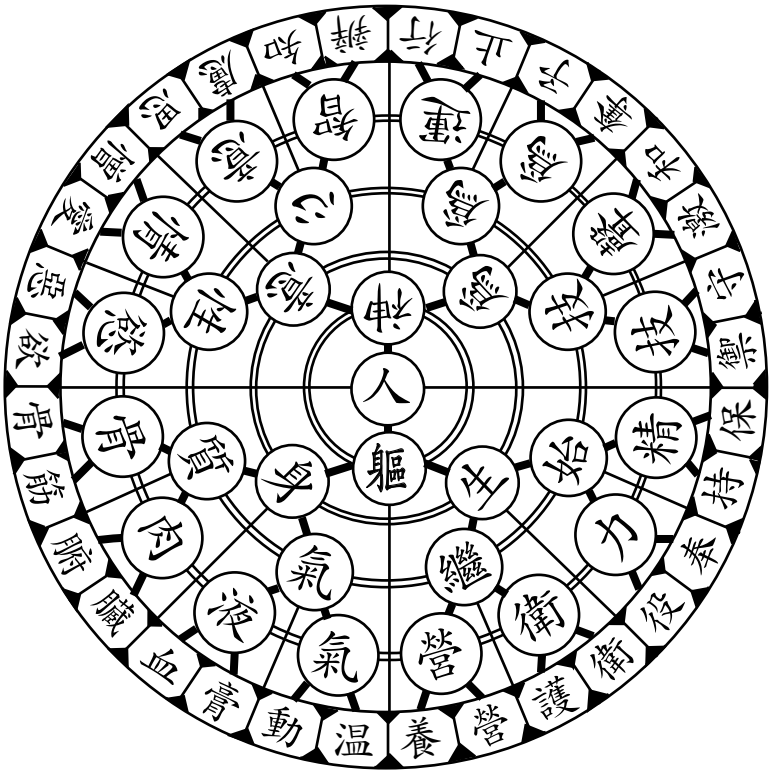
天人給資圖

體用性才天人合圖



混氣體圖

與後條氣體圖爲一合以觀神軀之全


神
人
軀
主
始
精
力
衛
營
護
衛
營
養
温
動
膏
血
臟
腑
筋
骨
肉
膚
氣
氣
液
身
腎
骨
髓
氣
液
心
肺
皮
毛
表
裏
津
液
腠
理
汗
孔
呼
吸
行
止
辨
知
感
思
慮
動
作
容
貌
聲
音
言
語
飲
食
消
化
排
泄
守
禦
保
持
奉
役
衛
護
營
養
温
動
膏
血
臟
腑
筋
骨
肉
膚

一四九一一　　粲物
一四九一二　植は則ち無意なり、
一四九一三　動は則ち有意なり、故に
一四九一四　氣は溫動冷止を隔つ、故に
一四九一五　體は竪堅横輭を隔つ、故に
一四九一六　植は骨液を身生に於て一にす、
一四九一七　動は性爲を意技に於て分かつ、
一四九一八　混ずれば則ち其の文を没す、
一四九一九　分かてば則ち其の文を露す、
一四九二〇　文なる者は。臟腑に依りて成る。
一四九二一　臟なる者は、氣を藏むる者なり、故に能く氣と交を爲す、
一四九二二　腑なる者は、物を納るる者なり、故に能く物と接を爲す、
一四九二三　神本は精麁を分つ、
一四九二四　臟腑は内外を分つ、故に
一四九二五　混物は、則ち身生神爲にして、動植は同じく之を有す、
一四九二六　粲物は、則ち臟腑意作にして、動は能く之を分つ、是を以て。
一四九二七　動は粲物を有す。以て氣質に交接す。是に於て。
　　神本天地の氣を内に於て有す、

(I 535b)

彩聲臭味の氣を外に於て交う、
水穀便溺の質を内に於て畜う、
配嗣器地の質に外に於て接す、
神なる者は、爲の神にして、之を心に於て運す、
本なる者は、成の天にして、之を腎に於て持す、
神は有意を爲す、
本は無意を成す、
本神は以て一身を混成す。然りと雖も。
神は心に由りて運神の地を占む、
本は腎に由りて持本の地を占む、故に
神本の二氣は、能く混粲の物を成す、
心腎の二物は、能く運持の氣を成す、
天氣なる者は動なり、噫嗡して之を肺に於て保す、
地氣なる者は實なり、飲食して之を肝に於て化す、
彩なる者は、體の靜にして而して有する者なり、之を目に於て視る、
聲なる者は、氣の動にして而して發する者なり、之を耳に於て聽く、
既に其の竅を開けば。則ち各おの其の神を有す。各おの其の知覺を爲す。
色なる者は。目の覺る所なり。而して色は氣質を有す。

(PB 221)

一四九二八
一四九二九
一四九三〇
一四九三一
一四九三二
一四九三三
一四九三四
一四九三五
一四九三六
一四九三七
一四九三八
一四九三九
一四九四〇
一四九四一
一四九四二
一四九四三
一四九四四
一四九四五

一四九四六　氣は明暗に色す、
一四九四七　質は黒白に彩す、蓋し
一四九四八　目は至明に逢えば則ち閉ず、
一四九四九　　至暗に値えば則ち盲す、
一四九五〇　晝は則ち神　旺す、
一四九五一　夜は則ち神　潛む、
一四九五二　蒼蒼の天。歷歷の曜より。物を彩に於て爲せば。則ち得て之を見る。故に
一四九五三　目や明なれば則ち彩を其の中に於て辨ず、
一四九五四　　暗なれば則ち彩を其の中に於て失す、
一四九五五　彩なる者は、靜にして有す、故に常に　之を有す、
一四九五六　聲なる者は、動にして發す、故に時として之を有す、蓋し
一四九五七　彩聲臭味の氣は。則ち意爲の用いざること能わざる所なり。
一四九五八　已に之を用いざること能わざれば。則ち其の交器無きこと能わず。
一四九五九　彩なる者は、體の靜にして之を有す者なり、
一四九六〇　聲なる者は、氣の激にして之を得る者なり、蓋し
一四九六一　色なる者は則ち明暗と寒熱の氣と偶す、氣の大なる者なり、
一四九六二　彩なる者は則ち黒白と清濁の氣と對す、氣の小なる者なり、故に
一四九六三　人は明暗に睡覺す、

(PB 222)
(I 536a)

寒熱に粛舒す、
黒白に見る、
清濁に聞く、蓋し
彩聲臭味は。物は各おの之を有す。物は限る所有れば。則ち
彩聲臭味も。亦た限る所有り。
彼。暗からざれば則ち明に。明ならざれば則ち暗く。
寒からざれば則ち熱し。熱せざれば則ち寒するに異なる。
目は、隆然洞朗にして、其の彩を辨ず、
耳は、邃乎空豁にして、其の聲を受く、
其の氣は精を以て鼻舌の上に居る。
又た臭味と。精麁と偶を爲す。
臭なる者は、氣の熱に由りて醸す者、之を鼻に於て聞く、
味なる者は、性の潤に由りて畜る者、之を舌に於て味う、
聲なる者は、激にして發す、
彩なる者は、靜にして有す、
臭なる者は、動にして發す、
味なる者は、靜にして有す、
又た各おの精麁有り。凡そ物は各おの彩聲臭味を有す。

一四九八二　彩は目に覺る、
一四九八三　聲は耳に覺る、
一四九八四　臭は鼻に覺る、
一四九八五　味は舌に覺る、是れ
一四九八六　外に在る者なり。且つ其の己に有するが者の如きなり。
一四九八七　彩味なる者は。靜なる者なり。
一四九八八　臭なる者は、内畜して外發せず、
一四九八九　聲なる者は、内運して外發す、故に
一四九九〇　臭なる者は、血肉便溺の畜なり、
一四九九一　聲なる者は、思慮運爲の發なり、
一四九九二　内畜の臭、外に漏るる者を胡と爲す、
一四九九三　外發の聲、内に結する者を唖と爲す、
一四九九四　且つ夫れ家狗の人を尾する。
一四九九五　風に向って鼻を鼓し。左右迂曲し。
一四九九六　必ず其の跡を辨ず。是に由りて之を觀れば。
一四九九七　人の覺は、舌を鼓するに通ず、
一四九九八　狗の覺は、鼻を聞するに通ず、
一四九九九　水なる者は、物を液する者なり、

穀なる者は、物を養する者なり、
之を咽に於て納れ、之を胃に於て畜う
便なる者は、穀の滓なり、
溺なる者は、液の汚なり、
之を腸に於て送り、之を脬に於て收む
物は通氣に從いて行く。神爲を以てして爲す。
經には則ち相い繼ぐ、
緯には則ち相い對す、
衰衰として逝く、故に小物も亦た之に繼て從う、
坱坱として塞す、故に小物も亦た偶を得て立つ、
天は用を以てして運す、故に小物も亦た用を以てして運す、
神は物を以てして立す、故に小神も亦た物を以てして立す、故に
時は通ずれば、則ち後は前を繼ぎて絶えず、
處は塞すれば、則ち天は地に偶して離れず、故に
大物は。則ち天地を偶として。而して前後を繼とす。
水火土石は、自から結ぶを以てす、而して偶は反に資り、繼は氣に資る
鳥獸艸木は、感を有するを以てす、而して
植は、華實を偶とし、種子を繼とす、

(PB 223)

(I 536b)

一五〇〇
一五〇〇一
一五〇〇二
一五〇〇三
一五〇〇四
一五〇〇五
一五〇〇六
一五〇〇七
一五〇〇八
一五〇〇九
一五〇一〇
一五〇一一
一五〇一二
一五〇一三
一五〇一四
一五〇一五
一五〇一六
一五〇一七

一五〇一八
一五〇一九
一五〇二〇ー二一
一五〇二二
一五〇二三
一五〇二四
一五〇二五
一五〇二六ー二七
一五〇二八
一五〇二九
一五〇三〇
一五〇三一
一五〇三二
一五〇三三
一五〇三四ー三五
一五〇三六
一五〇三七ー三八
一五〇三九

動は、牝牡を偶とし、子母を繼とす、
天は動き地は止る。動なる者は以て行く、
止なる者は以て事す、故に東運西轉は、天に行わる、
冬夏晝夜は、地に事す、
雲騰雨墜は、地に行わる、
發收動息は、物に事す、
小物の應ずる所。運は行を爲す、
爲は事を爲す、故に動植を分てば、則ち植は止りて技せず、
動は行きて事を爲す、故に
植は、則ち升降に行きて、發收に事す、
動は、則ち手に事に技し、足に行に運す、故に
手足無き者有り。手足有る者有り。而も
其の事に技し。其の行に運するに至れば。則ち同一なり。故に
天は地に偶し、会は易に偶し、絪縕窮まり無し、
雌は雄に配し、華は實に配し、生生盡きず、生生盡きず。故に
大物、則ち後は前に繼ぎ、寒は暑に繼ぐ、
小物、則ち實は苗を嗣ぎ、母は子を繼ぐ、故に偶は以て對す、
繼は以て往く、

一五〇四〇　事に技す、
一五〇四一　行に運す、
一五〇四二　大小と無く。同じく之を有す。惟だ
一五〇四三　精麁は相い隔つ。其の狀は夐別なり。
一五〇四四　配する者は、己の偶なり　之を会に於て交う、
一五〇四五　嗣する者は　己の苗なり、之を乳に於て字す、
一五〇四六　男女の受授は、生生の氣感なり、
一五〇四七　子母の乳哺は、生生の字育なり　故に
一五〇四八　男は生生の器に餘有り、
一五〇四九　女は生育の器に餘有り、故に
一五〇五〇　精は、生生の氣に感ずれば、則ち有り
一五〇五一　乳は、字育の日に非ざれば、則ち無し、
一五〇五二　共に腑の物を納るる所なり。
一五〇五三　地なる者は、我の立する所、之を足に於て歩す、
一五〇五四　器なる者は、我の用うる所、之を手に於て舞す、
一五〇五五　腑なる者は物を納る。何ぞ手足の物を納れざる。蓋し
一五〇五六　人の爲は。手　以て技巧を執る、
一五〇五七　足　以て軀殻を載す、

一五〇五八　載せて以て地を行く、
一五〇五九　執りて以て物に技す、
一五〇六〇　器地なる者は、身の外なり、
一五〇六一　水穀も、亦た、身の外なり、
一五〇六二　運爲繼偶。諸を天地に獲る、
一五〇六三　諸を各物に交う、故に
一五〇六四　心肺肝腎、咽胃腸脬、内に在るの臟腑なり、
一五〇六五　臟なる者は氣を藏す、故に内を實す、
一五〇六六　腑なる者は物を納る、故に内を虚す、
一五〇六七　水穀便溺。身の物に非ず。
一五〇六八　資りて繼ぐの氣は。此を假らざれば。則ち立たず。故に
一五〇六九　物は此を得る。而る後、膩液を釀す、
一五〇七〇　溫動を輔す、
一五〇七一　息なる者は、天氣を肺に於て引く、而して一身を衛す、
一五〇七二　其の氣は循環し、又た鼻に出す、
一五〇七三　食なる者は、地氣を肝に於て運す、而して一身を營す、
一五〇七四　滓汚は便溺を爲し、而して之を肮孱に送る、
一五〇七五　耳目鼻舌、手足会乳は、外に在るの臟腑なり、而して

(I 537a)

(PB 225)

一五〇七六　臟なる者は内肉なり、内肉は外に在ると雖も、亦た能く皮の爲に覆る、
一五〇七七　腑なる者は外皮なり、外皮は内に在ると雖も、亦た能く肉の表と爲す、
一五〇七八　内なる者は上に在り、乃ち神氣の所分なり、
一五〇七九　外なる者は下に在り、乃ち本氣の所分なり、
一五〇八〇　本氣は腑を用いて爲をす、
一五〇八一　神氣は臟に由りて意をす、
一五〇八二　本氣は本を爲す、
一五〇八三　神氣は華を爲す、
一五〇八四　資りて始まるの氣は、坱洋然として處無し、
一五〇八五　此の氣や、有生の始に成る、
一五〇八六　體解の末に散ず、
一五〇八七　首は上質の肉を攝す、
一五〇八八　身は下質の皮を攝す、
一五〇八九　噦噦は我を保す、飲食は我を養す、
一五〇九〇　資りて繼ぐの氣は、鼻口を門戸と爲す、
一五〇九一　此の氣や、有生の後に成る、
一五〇九二　體解の前に盡く、
一五〇九三　臟なる者は、心肺肝腎、耳目鼻舌、皆な上向す、

一五〇九四　腑なる者は、咽胃腸脬、手足会乳、皆な下向す、
一五〇九五　而して内なる者は意を舎てれば、則ち本氣は此に旺す、
一五〇九六　外なる者は意を用うれば、則ち神氣は此に旺す、
一五〇九七　目は視て耳は聽き、鼻は聞き舌は味わうは、意を外に於て用するなり、
一五〇九八ー九九　肺は保し肝は養し、心は運し腎を持するは、意を内に於て保するなり、氣の用なり、
一五一〇〇　咽は納れ胃は畜え、腸は送り脬は收むるは、爲を内に於て爲すなり、
一五一〇一ー〇二　手は技し足は行き、会は交し乳は孳するは、爲を外に於て爲すなり、質の用なり、
一五一〇三　然り而して神なる者は内に在りて、而して外之を用う、
一五一〇四　氣なる者は外を護して、而して内之を用う、故に
一五一〇五　神は心に華し、而して腎に實す、肺肝は氣を以て保養す、
一五一〇六　咽胃は納畜し、腸脬は收送す、共に内に在る者なり、
一五一〇七　皆な意を以て運用すること能わざる者なり、
一五一〇八　氣は配に華し、而して嗣に實す、手足は肢を以て技行す、
一五一〇九　耳目は視聽し、鼻舌は聞味す、共に其の外に在る者なり、
一五一一〇　皆な能く意を以て運用す可き者なり。故に
一五一一一　臟は神氣の器を爲し、
一五一一二　腑は本氣の器を爲すと雖も、而れども
一五一一三　内質は還って有爲の器を爲す、

(I 537b)

(PB 226)

(其を欠くか。)

外質は還って用意の器を爲す、且つ
神本は迭に旺す　而して一睡一覺す、
氣質は相い給す、而して一食一息す　夫れ
神本なる者は、生と偕に立す、故に一身に充塞す　而して門戸を假らず、
臟腑なる者は、物を得て能く立す、故に氣質を運化して、能く門戸を用う、
息食の受口を　口と爲し　鼻と爲す、
便溺の瀉口を　肛と爲し　扃と爲す、
鼻なる者は、喉の口なり、
口なる者は、咽の口なり、
肛なる者は、脬口なり、
扃なる者は　腸口なり
此れ各一物にして、
而して二名を具す、
合して之を咽胃腸脬に於て統ぶ。別に此の文有るに非ざるなり。是を以て。
鼻舌なる者は、聞味を　具する所の臟なり　而して
鼻口　は、息食の道路なり　（この行のみ「者」を欠く。書き損じか。）
会乳なる者は、交字の生を具する所の腑なり、而して
肛扃なる者は、便溺の瀉口なり、

一五一一四
一五一一五
一五一一六
一五一一七
一五一一八
一五一一九
一五一二〇
一五一二一
一五一二二
一五一二三
一五一二四
一五一二五
一五一二六
一五一二七
一五一二八
一五一二九
一五一三〇
一五一三一

一五一三二　臟なる者は氣を藏す、
一五一三三　腑なる者は質を用す、故に
一五一三四　耳目は聲彩を通ず、
一五一三五　鼻舌は臭味を受く、
一五一三六　肺肝は、天地の氣を保化す、
一五一三七　心腎は、神本の氣を運持す、而して
一五一三八　視聽は、或いは用し或いは體す、
一五一三九　聞味は、或いは欲し或いは厭う、
一五一四〇　咽胃は水穀を運す、
一五一四一　腸脬は便溺を通ず、
一五一四二　会乳は精汁を生化す、
一五一四三　手足は器地を握歩す、而して
一五一四四　手足は、或いは取り或いは捨つ、
一五一四五　精汁は、或いは有り或いは無し、夫れ
一五一四六　動物なる者は。種子を相い繼ぎ。先後の體を換うる者なり。故に
一五一四七　發生の氣は、感ずれば則ち精を得る、
一五一四八　生育の氣は、通ずれば則ち乳を生ず、
一五一四九　臟は、肝に根し、肺に葉し、心に華し、腎に實す、而して

(PB 227)
(I 538a)

一五一五〇　彩聲臭味を受くるの孔を　頭中の耳目鼻舌に於て開きて　而して
一五一五一　其の系は上を向きて　氣の用を爲す、
一五一五二　腑は　身に幹し　肢に枝し　配に華し　嗣に實す　而して
一五一五三　水穀便溺を受くるの孔を　腹中の咽胃腸脬に於て開きて　而して
一五一五四　其の系は下を向きて　質の用を爲す、
一五一五五　臟なる者は　神氣を親しむ　神氣なる者は　養を肺肝の息脈に於て資る、
一五一五六　腑なる者は　本氣を親しむ　本氣なる者は　養を咽胃の水穀に於て資る　故に
一五一五七　神本の養う所は皆な内に在り、
一五一五八　　資る所は皆な外に在り、
一五一五九　神なる者は　氣を耳目鼻舌に於て發す、
一五一六〇　本なる者は　爲を手足会乳に於て發す　故に
一五一六一　内なる者は　天の用を爲すの器なり、
一五一六二　外なる者は　人の用を爲すの器なり、
一五一六三　動植は本と同生。竪立横動し。意爲を没露す。故に
一五一六四　植は地に著きて竪立し　直に寒暑雨暘に當る　是れ其の本氣に長ずるを以てなり、
一五一六五　動は地を離れて横行し　巣窟飲哺を假る　是れ其の神氣に長ずるを以てなり、
一五一六六　此に長ずれば　則ち
一五一六七　彼に短なり　二の勢なり　故に。

一五一六八ー六九　植は、自から護するの本に足る、故に保養は之を自然に任す、
一五一七〇ー七一　動は、自から護するの本に乏し、故に保養は之を營爲に仰ぐ、（PB 228）
一五一七二　堅植は、顛植の榮枯を假らず、
一五一七三　堅動は、顛動の飛走を假らず、
一五一七四　偏に各おの其の天を保するなり。夫れ。
一五一七五　生の處は、則ち水なり、燥なり、而して水は則ち我の處に非ず、
一五一七六　生の類は、則ち動なり、植なり、而して植は則ち我の類に非ず、然り而して
一五一七七　本生は、則ち水燥を天地にす、
一五一七八　餘生は、則ち分れて小物に依る
一五一七九　陸は。日影、寒暑晦明を爲す、
一五一八〇　水燥、雨暘煦液を爲す、故に
一五一八一　水動は。諸を陸動に比すれば。則ち
一五一八二　陸動は。絪縕の和を得て。文を具し神に富み。
一五一八三　歧形多技にして。以て聰明の神を有す。
一五一八四　之を分てば。則ち鳥は輕く獸は重く。獸は靈に鳥は頑なり。
一五一八五　鳥は、手を以て翼と爲し、翼を以て身を行る、足を以て事を執る、
一五一八六　獸は、翼を以て手に換へ、足を以て事を執る、然り而して　（執事を行身に訂正傍記。）
一五一八七　鳥は則ち本氣に富む、

獣は則ち神氣に富む、
神氣に乏しければ、則ち本氣に足る　故に
羽は、歩翔自在にして、羽翼自から護し、産啄に易く、謀慮に拙なり、
神氣に富めば、則ち本氣に乏し　故に
獣は、歩きて翔かず、營窟假ること有り、産ずること少く乳すること久しく、思謀漸く巧なり、
蓋し衆易の態は。兩つながら長ずること能わず。故に
生に餘有る者は、文に足らず、
文に餘有る者は、生に足らず、是を以て。
植生は動生より多し、
海動は陸動より多し、故に
海動陸植は。子を生むこと數萬にして。而して陸中。獣は鳥より寡し。
獣中。穎悟は人に勝るは莫し。

（朱書追記につき削除）

故を以てすれば。則ち人は當に最も寡かるべし。然りと雖も、
智力に勝ること有るを以て。以て能く蕃滋を致す。
終に其の神を運爲して。天地に取りて。我が有と爲し。
萬物を以て。我が器と爲す。神氣の長ずるを以て。而して
本氣は自立すること能わず。産乳は最も艱し。疾病は最も多し。

(I 538b)
(PB 229)

一五一八八
一五一八九
一五一九〇
一五一九一
一五一九二
一五一九三
一五一九四
一五一九五
一五一九六*
一五一九七*
一五一九八
一五一九九
一五二〇〇
一五二〇一
一五二〇二
一五二〇三
一五二〇四
一五二〇五

一五二〇六　外護内養は。都て不足を神氣に於て補う。故に
一五二〇七　木を架し茅を覆い。以て風雨を禦ぎ。
一五二〇八　麻を績ぎ繩を繰し。以て寒暑を防ぐ。
一五二〇九　燧を鑽りて火を引き。井を鑿ちて水を出だす。
一五二一〇　海を煮て鹽を取り。土を墾して穀を斂む。
一五二一一　痛痒を医藥の營に於て攻む。
一五二一二　饑渇を調和の爲に於て養う。
一五二一三　屋宇を假らざれば。則ち雨暘に當ること能わず。
一五二一四　屨屐を假らざれば。則ち土石を踐むこと能わず。
一五二一五*　本氣の不足を神氣の有餘に於て觀る可し。故に
一五二一六　此に贏る者は、彼に儉なり、
一五二一七　彼に贏る者は、此に儉なり、
一五二一八　彼此は相い儉贏すと雖も。而も成る所に於ては則ち全なり。
一五二一九　一二の故なり。故に
一五二二〇　同じく内外臟腑を具すと雖も、
一五二二一　同じく營爲技巧を具すと雖も、
一五二二二　人と能を爭う者莫きなり。
一五二二三*　故に生の類は。通塞巧拙に於ては則ち各おの有するなり。

一五二四　物は自から氣を具す、
一五二五　神は自から物を用す、
一五二六　鬼神の物に體して遺さざる所なり。
一五二七　萬物は各おの鬼神を存する所なり。
一五二八　無意感求は性を爲し　知通は神を爲す、
一五二九　有意情慾は性を爲し、　意智は神を爲す、
一五三〇　同じく是れ性神と雖も。天人は同じからざるなり。蓋し
一五三一　人なる者は。有意の統名なり。　(I 539a)
一五三二　禽獸蟲魚も。亦た皆な意を具す。惟だ
一五三三　物の殊なるを以て。而して氣も殊なり。
一五三四　通塞は同じからざるなり。故に
一五三五　彼に我の神靈の通。鼓舞の巧無し。
一五三六　此に通ずる者の、
一五三七　彼に塞するは、條理の道なり。是の故に。
一五三八　物は氣感に厚し、
一五三九　人は知通に深し、　(PB 231)
*一五二四〇－四一　其の氣を以て感ずる者は定まる、磁の北を指し、水の卑きに就き、鷄の晨を知り
一五二四二　燕の春を知る、期するが如く然るなり、

（欄外追記なれど左の対となる。）

一五二四三―四四　其の智を以て通ずる者は變ず、好惡思辨は別ならずと雖も、感應運爲は同じからず、
一五二四五　故に意通氣感は。跡は則ち反す、
　　理は則ち同す、
一五二四六　人なる者は、之を思いて覺る、
一五二四七　之を慮りて通ず、
一五二四八　之を學びて能す、
一五二四九　之を謀りて爲す、
一五二五〇　物なる者は、知る可き者は自から知る、
一五二五一　能す可き者は自から能す、
一五二五二　鳥の卵に伏す。殼を隔てて其の化を知る。啐啄相い得て。
一五二五三　之を誤る者無し。若し之を智慮に於て索めば。
一五二五四　能く之を知ると雖も。寧んぞ忘失せざるを保たんや。若し夫れ。
一五二五五　食色　心を動かし、
一五二五六　睡覺　智を轉ずるも、亦た
一五二五七　人の氣感にして。而して意智の隨なり。
一五二五八　人は則ち有意なりと雖も。亦た無意を平分す。故に
一五二五九　思慮智辨、經營動作に於ては、則ち之を知ると雖も、
一五二六〇　運持保化、老壯病健に於ては、則ち識らず、
一五二六一

一五二六二　分かつ者は、物なり、
一五二六三　有する者は、氣なり、
一五二六四　物に天地有り、鬼神は之に由る
一五二六五　事に感應有り、氣質は之を用う　故に
一五二六六　日月に行有り、寒暑に序有り、南北に方有り、　天地に位有るは、
一五二六七　物の體なり、常なり、
一五二六八　日月の旋轉し、寒暑の往來し、南北の節を迭るに、天地の相い通ずるは、
一五二六九ー七〇　氣の用なり、變なり、故に鬼神は、天地を以て體と爲す、
一五二七一　天地は、鬼神を以て用と爲す　故に
一五二七二　神なる者は、水を爲し、火を爲し、有意を爲し、無意を爲す、
一五二七三　天なる者は、水と成り、火と成り、有意と成り、無意と成る、
一五二七四　而して穎悟多文。天地と勢を張る者は。惟だ人のみ有る。故に
一五二七五　搏きて雲霄に狎るるも、繳みして之に及び
一五二七六　潛んで幽壑に蟄するも、餌して之を鉤す　(PB 232)
一五二七七　含牙戴角も、服して之を役す、
一五二七八　利觜鉤爪も、繫して之を檻す、
一五二七九　日月星辰を曆象す、
一五二八〇　山川丘陵を經界す、是に於て。　(I 539b)

江海山原。金木土石。艸木鳥獸。魚鼈蟲豸。己の用に非ざる者莫し。
能く聲音を轉じて、而して萬の事物、擧げて之を言語に於て認む
能く手腳を役して、而して萬の技巧、盡く之を營爲に於て運す、
已にして字を造りて、而して言語を指頭に記す、
畫を製して、而して物象を目中に認む、
我は天地に有せられて、而して
我も亦た天地を有す、
勢を張れば。則ち天は無意にして成る、
人は有意にして爲す、
彼は天境を開きて、而して物は盡く其の中に居る、
此は人境を開きて、而して己れ獨り此の中に立つ、是を以て。
天の境を爲すや、無意にして成る、
人の境を爲すや、爲して成らず、
神は内に運し、爲は外に營す、
彩を目に於て取り、聲を耳に於て取る、
氣を鼻に於て取り、性を舌に於て取る、
技を手に於て運し、行を腳に於て用う、
交を会に於て通し、字を乳に於て爲す、

一五二九九　意の外用なり、
一五三〇〇　嘑嗡して天氣を臟中に於て保す、
一五三〇一　飮食して地質を腑中に於て化す、
一五三〇二　嘑嗡飮食は　天の生生に給す、
一五三〇三　意智情慾は　人は其の中に於て成す、
一五三〇四　爲の内用なり、
一五三〇五　鳥は、技　觜腳に在り、
一五三〇六　獸は、技　歯爪に在り、
一五三〇七　惟だ指を蹄にする者は、技　口鼻に在り、
一五三〇八　爪歯に利からざる者は、技　手指に在り、然り而して
一五三〇九　魚は。　則ち之を鰭尾に於て施し。
一五三一〇　蟲豸は。則ち變化萬狀なり。且つ
一五三一一　諸動の聲に於るも亦た技なり、而して
一五三一二　鱗倮は聲技を用うる者　少し、
一五三一三　鳥獸は聲技無き者　少し、
一五三一四ー一五　餘生の若きに至りては。羽類に聲無き者有り、有れば則ち之を羽に於て發す、
　　豸類に聲無き者多し、有れば則ち之を喉に於て鼓す、
一五三一六　鳥獸に至りて。而る後に喚嘑哀樂。之を聲に於て用う。

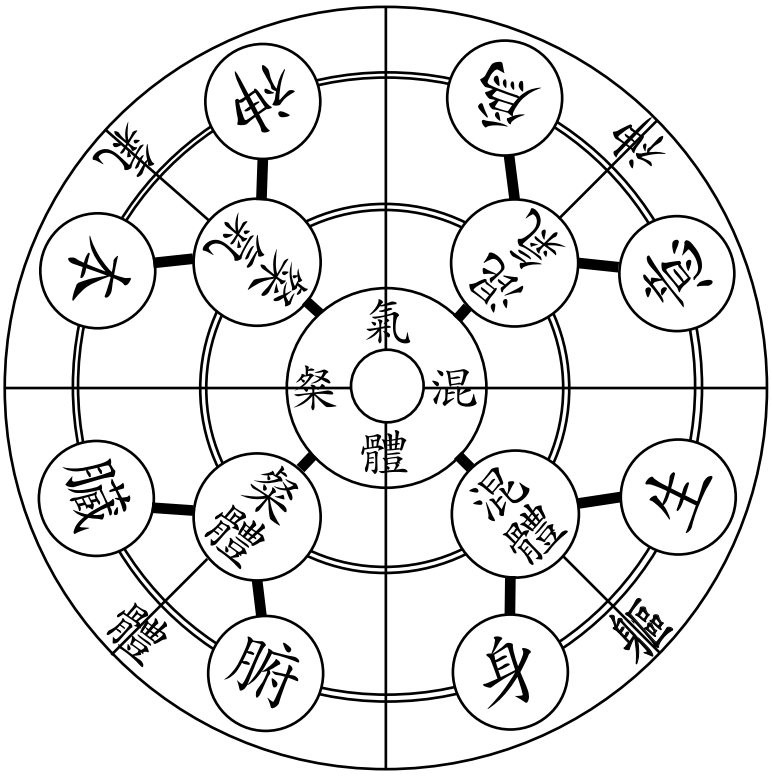
一五三一八　人の有意多智なるに及んで。聲の技に於る。體技と半ばす。
一五三一九　言語は文章を爲す、
一五三二〇　營爲は事業を成す、
一五三二一　意智は、則ち思慮知辨なり、
一五三二二　情慾は、則ち愛憎欲惡なり、故に
一五三二三　知は通塞信疑を有す、
一五三二四　辨は善惡是非を生ず、
一五三二五　思は予奪殺活を致す、
一五三二六　慮は正詐安危を成す、
一五三二七　思辨好惡は。融して分せず。神は變化を此に於て運す。
一五三二八　粲物なる者は。門室に由りて。而して行居を爲し。
一五三二九　混物の爲に。能く其の役を執る。故に
一五三三〇　彩聲氣性なる者は、氣の我に交わる者なり、
一五三三一　配嗣器地なる者は、質の我に接する者なり、
一五三三二　物は氣感に厚し、
一五三三三　人は意念に深し、
一五三三四　意念の運する所は。思　注ぎて、而して嗜好淫念を僻す、
一五三三五*　情　厭いて、而して厭惡棄捐を出す、

(PB 234)
(I 540a)

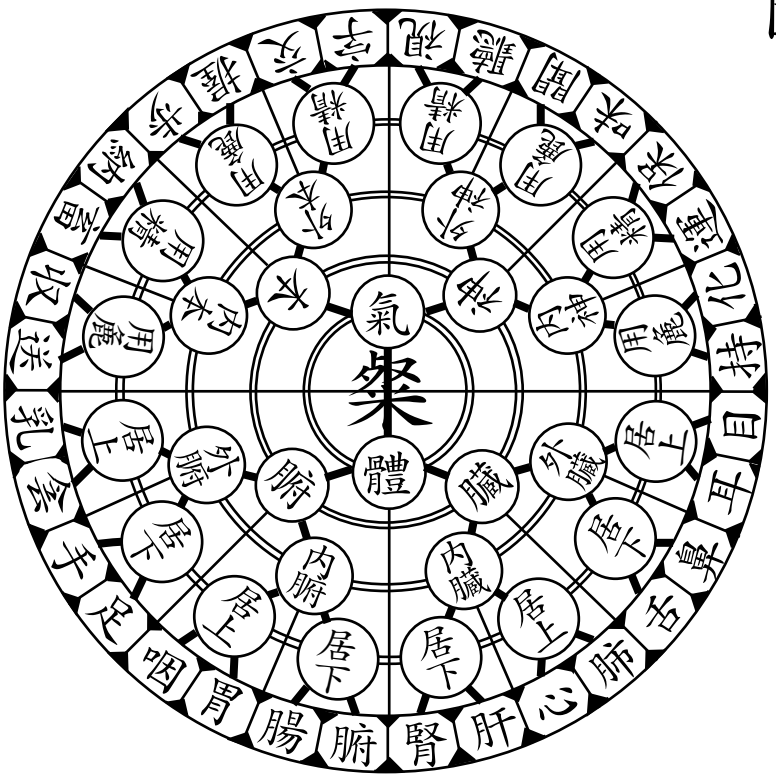
一五三三六　本氣の弱を以て。意念を役すること之れ深し。故に。
一五三三七　憂樂は節を失い。疾病を内に釀す。
一五三三八　其の天壽を保するに於るや。則ち物に逮ばず。
一五三三九　我を利すれば則ち彼を損す、
一五三四〇　我を快すれば則ち人を困す、
一五三四一　彼我は用を反して。勞逸は塗を殊にす。是の故に。
一五三四二　聖人は。則を天地に於て觀て、以て道を立す、
一五三四三　爲を設施に於て開き、以て禮を制す、是に於て。
一五三四四　其の位は立す可し。其の分は守る可し。其の道は行う可し。其の宅は居る可し。
一五三四五　物に制度有り。事に法則有り。　(PB 235)
一五三四六　適否に由りて、而して悦怨の心を生し、而して以て善惡を擇ぶ、
一五三四七　當否に由りて、而して榮辱の智を分ち、而して以て是非を擇ぶ
一五三四八　之を知るに學を以てし、之を修するに禮を以てす、

(PB 236, I 540b)

混粲氣體圖



粲氣體圖


粲
氣
體
府
藏
內腑
內藏
居上
居下
外藏
肝
心
肺
脾
腎
胃
腸
咽
手
足
乳
食
呑
咳
聞
聽
視
言
化
持
目
耳
鼻
古
肺
心
肝
腎
脾
腸
胃
咽
足
手
食
呑
乳
咳
言
視
聽
聞
化
持
目
耳
鼻
古
粲
氣
體
府
藏
內腑
內藏
居上
居下
外腑
外藏
居上
居下
居上
居下
用精
用氣
用精
用氣
用精
用氣
用精
用氣

天人交接圖

外
內
藏
腑
目
耳
鼻
口
心
肝
脾
肺
腎
手
足
口
鼻
目
耳
心
肝
脾
肺
腎
握
步
言
氣
思
憂
悲
恐
視
聽
聞
味
臭
寒
天氣
地氣
本氣
地氣
天氣
寒
暑
濕
風
燥
火
水穀
水穀
便
溺
傷
形
憂
恐
喜
怒